2007年度　事業の概要

1 調査と研究 …… 26
飛鳥藤原京の発掘調査 …… 26
平城京の発掘調査 …… 27
企画調整部の研究活動 …… 27
文化遺産研究部の研究活動 …… 28
●歴史研究室の調査と研究 …… 28
●建造物研究室の調査と研究 …… 29
●景観研究室の調査と研究 …… 29
●遺跡整備研究室の調査と研究 …… 30
埋蔵文化財センターの研究活動 …… 30
●保存修復科学研究室の調査と研究 …… 31
●環境考古学研究室の調査と研究 …… 31
●年代学研究室の調査と研究 …… 32
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究 …… 32
国際学術交流 …… 32
●中国社会科学院考古研究所との共同研究 …… 33
●遼寧省文物考古研究所との共同研究 …… 33
●河南省文物考古研究所との共同研究 …… 33
●韓国国立文化財研究所との共同研究 …… 34
●西アジア諸国の文化財修復保存協力事業 …… 34
●カンボジアＡＰＳＡＲＡとの
アンコール遺跡群西トップ寺院の共同研究 …… 34
海外からの主要訪問者一覧 …… 35
海外からの招聘者一覧 …… 35
奈文研研究者の海外渡航一覧 …… 36
公開講演会 …… 39
第100回公開講演会 …… 39
第101回公開講演会 …… 39
研究集会 …… 40
科学研究費等 …… 41
学会・研究会等の活動 …… 45
文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への
指導・助言・協力等 …… 46
●平城宮跡の整備 …… 46
●高松塚古墳石室の発掘・解体事業 …… 46
●キトラ古墳の調査 …… 47
発掘調査現地説明会・見学会 …… 47

2 研修・指導と教育 …… 48
埋蔵文化財担当者研修と指導 …… 48
京都大学（大学院）との連携教育 …… 48
奈良女子大学（大学院）の連携教育 …… 48

3 展示と公開 …… 50
飛鳥資料館の展示 …… 50
平城宮跡資料館の展示 …… 50
解説ボランティア事業 …… 51
図書資料・データベースの公開 …… 51

4 その他 …… 52
刊行物 …… 52
人事異動 …… 56
予算等 …… 57
職員一覧 …… 58

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥藤原地区において2007年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡６件、藤原京跡と飛鳥地域９件である。また2006年度からの継続調査として、石神遺跡の調査を５月まで、高松塚古墳の調査を９月まで実施してきた。これらも含めて、以下、主要な調査成果について概要を述べる。

藤原宮では、まず大極殿院南門の学術調査を実施した（第148次）。基壇は東西40.1m×南北14.4mにも及ぶ巨大なもので、戦前に日本古文化研究所が想定していたものよりも一回り大きい。基壇の南北中央部には、幅24.7m×出1.2mの突出部があり、巨大な階段が設置されていた。基壇の築成に際しては、掘込地業と版築をおこなっている。礎石据付掘形はすべて失われていたが、北面階段中央部の内側へ延びる抜取溝を手がかりに、桁行７間（約35m）×梁行２間（約10m）の門として復元できた。入念な基壇造成をおこなっていること、文献史料にみえる「重閣門」との関係から、重層門の可能性も考えられたが、建築学的な観点を重視して、単層門の可能性がより高いと判断した。

さらに、この調査の最終段階では、南門と南面西回廊の取り付き部付近から、地鎮具として埋納された平瓶が出土した。平瓶には口縁部に富本銭９枚、内部には水晶９点と液体が入っていた。富本銭は飛鳥池遺跡で鋳造されたものとは字体や成分が異なるが、古銭の収集界に伝存していたものに類似品がある。

また農業用水路の改修工事にともなって、藤原宮朝堂院東地区の発掘調査を実施した（第149－10次）。総長114mにわたって、幅1.5～２mのトレンチを入れた結果、５世紀中葉の古墳周濠や、藤原宮期とみられる掘立建物を複数検出した。建物のうち１棟は、１辺1.5mの巨大な掘形をもつ庇付の東西棟と推定されるものである。

藤原京域では、工事にともなう事前調査として、右京一条五坊および右京八条二坊の発掘を実施した（第149－5・7次）。前者の調査では、藤原宮期の建物などのほか、横大路の南側溝が２時期分検出された点が特筆される。２条の溝の重複関係や、出土遺物の分析から、平城遷都後も道を改修して使用し続けていた点が裏づけられた。後者の発掘調査では、期待された八条大路北側溝は削平のため検出できなかったが、弥生時代から中世に至る活動痕跡を確かめることができた。

飛鳥地域に目を転じよう。昨年度から11ヶ月の長期に及んだ高松塚古墳の調査は、石室解体という厳しい局面でのものであった。通常の発掘調査における実測・写真撮影に加えて、ビデオ撮影、３Ｄ・写真測量、拓本採取、土層の剥ぎ取り転写、搗棒・杭坑の型取り、地質学的な調査をはじめ、可能な限りの記録や保存に努めた。こうした地道な作業を通じて、石室の組み立て形や墳丘の築成過程が明らかになるとともに、壁画保存環境の劣化原因を解明する手がかりが得られた。

石神遺跡では、北方域の学術調査を２ヶ所において実施した（第145・150次）。最初の調査では、念願であった阿倍山田道の検出に成功した。敷葉工法をとって路面を構築し、側溝位置を複数回変えながら、７世紀中葉から藤原宮期まで使用され続けたことが判明した。出土遺物も豊富で、７世紀中葉の良好な土器の一括資料、日本最古級の木簡が特に注目される。

もうひとつの調査では、石神遺跡中心施設群の東北部を対象とし、石組溝・暗渠や掘立柱建物・塀などを複数検出した。石神遺跡の東限に関わるとみられる建物もあり、次回の調査によって詳細を確かめる予定である。今後の重要な課題は、石神遺跡の範囲を確定し、史跡指定のための条件を整えていくことである。

甘樫丘東麓遺跡でおこなった学術調査では、７世紀代の建物や塀を多数検出した（第151次）。蘇我氏の邸宅との関係が指摘されている場所であるが、今回７世紀中葉の土器を大量に含む土坑の下層において、建物を検出することができ、７世紀前半代から土地利用されていたことが具体的に確かめられた。比較的小型な建物が多く、蘇我氏の邸宅であることを直接裏づけるような発見にはいたっていないが、今後もこの一帯の継続調査を通じて、遺跡の性格を明らかにしていきたいと考えている。

最後に、2007年度の発掘調査に伴って実施した現地説明会・見学会を示しておく。

飛鳥藤原第148次（大極殿院南門）
　現地説明会　2007年９月８日　高田貫太
飛鳥藤原第150次（石神遺跡）
　現地説明会　2007年12月15日　黒坂貴裕
飛鳥藤原第151次（甘樫丘東麓遺跡）
　現地見学会　2008年３月29日　豊島直博

平城京の発掘調査

2007年度の発掘調査は平城宮跡４件、平城京跡８件の計12件をおこなった。主な発掘調査として、平城宮跡では東院地区（第421次・第423次）および東方官衙地区（第429次）、平城京跡では西大寺薬師金堂（第422次）の各調査があげられる。その他の調査は、いずれも小規模なものであり、詳細については『奈良文化財研究所紀要2008』を参照されたい。

平城宮の東部には南北750m、東西250mの張り出し部があり、その南半部分（南北350m）を東院地区と呼んでいる。都城発掘調査部では2006年度以降、東院地区中枢部分の本格的な解明を目指して継続的な調査を実施している。今年度は春と秋に分けて２回の調査を計画し、１回目の発掘調査（第421次）では東院地区の内郭ともいうべき中枢部分を囲う区画施設を確認した。この区画施設は東院内郭の西南隅部分にあたると考えられることから、東院の中心施設が第421次調査区の北東方向に展開することがほぼ確実となった。また、昨年度の調査（第401次）に引き続き複雑に重複する掘立柱建物や塀の遺構がみつかり、少なくとも５時期にわたる遺構の変遷が確認できた。その結果、東院の建物配置が東院南門（建部門）の南北中心線により左右対称となるのは一時期のみで、他の多くの時期は左右対称の配置を取らないことが判明した。２回目の発掘調査（第423次）では、多数の大規模な掘立柱建物（一部は総柱）、縦横にはりめぐらされた石組溝とそれにともなうバラス敷きなどを検出し、第421次調査と同じく少なくとも５期にわたる遺構の変遷が明らかとなった。第423次調査で出土した遺物は土器や瓦の他、緑釉磚や凝灰岩切石、地鎮具の可能性がある灯明皿・さし銭など東院の性格を示すと思われるものが多くみられる点が特徴的である。今後の東院地区の調査においては西半のみでなく、東院地区全域の調査を進める必要がある。

第二次朝堂院と東院地区にはさまれる地区は、その立地や周辺の発掘調査の成果から重要な官衙区画の存在が推定されることから、東方官衙地区と呼んでいる。都城発掘調査部では東方官衙地区全体像の把握を目的として、2006年度から６m幅のトレンチによる試掘的な調査を実施している。本年度はその２年目にあたり、昨年度の調査（第406次）の南側に南北100m、東西130mのトレンチを配して発掘調査（第429次）をおこなった。第406次調査に引き続き、大型の礎石建物や掘立柱建物がみつかっており、当初の推定通り、大規模な官衙建物が整然と並び建つ姿が判明しつつある。

西大寺薬師金堂の発掘調査（第422次）は建物建設の事前調査として実施したもので、昨年度の調査（第409次）の西側に隣接した調査区を設定しておこなった。薬師金堂の基壇が良好な状況で残存しており、身舎を囲う入側柱の北側柱筋と庇を検出した。礎石の下に凝灰岩の切石２基を並べて据え付ける特異な工法を用いていることが判明した。限定的な範囲内での調査ではあるが、西大寺の中心建物である薬師金堂の状況を実証的に明らかにできた意義は大きい。

2007年度の発掘調査にともなう現場一般公開、現地説明会は以下のとおり。

第422次調査（西大寺薬師金堂）
　現場一般公開　2007年５月８日・６月12日
　　林　正憲
第421次調査（東院地区）
　現地説明会　2007年９月１日　山本　崇
第423次調査（東院地区）
　現地説明会　2008年１月19日　浅野啓介
第429次調査（東方官衙地区）
　現地説明会　2008年３月30日　今井晃樹

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体等の埋蔵文化財発掘技術者に対する研修、写真を含めた研究所関係の調査研究成果や文化財に関する情報の発信と展示公開普及、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報の整備充実、国際的な文化財の調査・保護活用に関する協力・援助と国際研究交流あるいは研修等についての企画調整、飛鳥資料館・平城宮跡資料館等での展示公開普及を中心にして、奈良文化財研究所がおこなう研究に係る事業について全体的・総合的に調整し、事業成果の内外への情報発信・活用を担当している。

埋蔵文化財発掘技術者研修については、企画立案し、高度で専門的な研修を実施している。2007年度も遺跡

の発掘調査における必要性が高く、さらに保存活用についても専門性の高い知識・方法が求められる課題について実施した。保存科学、写真撮影、遺跡保存整備について継続的に実施し、古代・中近世瓦と初めて竪穴建物遺構についても取り上げた。

文化庁の高松塚・キトラ古墳の壁画保存対策事業など国・地方公共団体がおこなう事業については、全所的に専門的・技術的な協力・助言をおこなっているが、企画調整部としてはこれらの所内および対外的な調整を担当した。

文化財情報の電子化およびシステム構築については、研究会等においてそれらの研究成果を公表するとともに、国内外の研究状況について学会に参加するなど情報の収集を図り、今後のシステム構築、改良等の検討材料とした。日常的には遺跡・図書・写真データベースおよび航空写真データの入力、ＮＡＲＳフィルムのマイクロ化、ＮＡＲＳフィルム、ガラス乾板、大判フィルム、航空写真のＣＤ化などを継続しておこなっている。

企画展示室では、飛鳥資料館での展示・研究事業、平城宮跡資料館などでの展示公開事業を統括的に実施している。このうち飛鳥資料館については、別項にまとめているので参照されたい。平城宮跡資料館については、継続して常設展の改善・整備をおこなう一方で、常設展示のリニューアルについても基本構想を策定し、遷都1300年に向けて具体化を目指している。また特別企画展として「地下の正倉院展」を開催し、平城京跡出土の木簡を取り上げ、展示した。さらに都城発掘調査部が実施した平城宮の東院地区や東方官衙地区、西大寺薬師金堂跡の発掘調査成果を速報展で取り上げた。

文化財の調査・保護活用に関する国際協力と研究交流あるいは国際研修等についても、別項に記した。

写真室では、都城発掘調査部の平城地区と飛鳥藤原地区での発掘記録を継続的に作成しているが、昨年度に続き文化庁による高松塚、キトラ古墳の壁画解体保存修復とそれに伴う発掘調査作業などについて写真記録を作成した。また、飛鳥資料館で開催した企画展示「『とき』を撮す」を実施するとともに図録を作成した。埋蔵文化財発掘技術者研修では、「文化財写真Ⅰ」「文化財写真Ⅱ」課程などを担当し、地方公共団体等の依頼に応じ専門的・技術的な協力・助言もおこなった。

なお、このほか全国の埋蔵文化財の調査・保存・活用などに関する情報収集、協力助言をおこなった。また、前年度に続いて全国・各時代の焼失竪穴建物を集成してきたが、本年度は北海道と岩手・宮城・栃木・石川・愛知・広島・鹿児島の各県についてデータベースを作成し、報告書『全国各地・各時代の焼失竪穴建物』を刊行した。

文化遺産研究部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室・建造物研究室・景観研究室・遺跡整備研究室の４室からなる。各室では、古都の寺社などが所蔵する古文書・古記録などの歴史資料や書籍資料、古代から近代にいたる歴史的建造物や発掘建築遺構、歴史的庭園や今日に残る文化的景観、発掘された遺跡の保存整備活用などについて、それぞれ専門的な立場から文化遺産の実物に即した調査研究をおこない、その歴史的な意義を追究するとともに、関係部局とも協力しつつ、情報の収集整理・公開や保存修理策などにも資する総合的研究を進めている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、世界文化遺産に登録されている寺社所蔵の書跡資料について、南都を中心として継続的な調査研究をおこなっている。さらに奈文研に寄贈された歴史資料についても調査研究をしている。

2007年度の諸寺社の調査は、興福寺・薬師寺・東大寺・唐招提寺・氷室神社大宮家、京都の高山寺所蔵の書跡資料についておこなった。興福寺調査では、従来把握されていなかった函の調査を進め、かつ、調書を作成した函の目録刊行を準備中である。2007年度は、東金堂文書函等の調書を作成した。東金堂文書函は、近代に東金堂の天井裏から発見された鎌倉時代から室町時代にかけての東金堂関係文書であり、極めて興味深い内容を有している。また、第89函65号の、文書が板に挟んである資料を『奈良文化財研究所紀要2008』に報告した。写真撮影は、東金堂関係文書等をブローニー版で撮影し、第89函をマイクロフィルムで撮影している。薬師寺では、第31函～第53函の調書作成をおこなった。写真は第24函を撮影している。

東大寺では、東大寺図書館収蔵庫第４号室収蔵の新

修東大寺文書聖教の調査を、科学研究費補助金も充当して実施した。主に中村準一寄贈文書を調査し、第35函・43函・44函・56函・75函・93函・98函の目録データをパソコンに入力し、一部写真撮影をおこなった。幕末の興福寺の動向が判明する日記などを見いだすことができた。唐招提寺所蔵資料については、惣倉所在の近代書類を調査し、かつ、唐招提寺弁天堂の弁才天板絵の写真撮影をおこなった。

また、京都の高山寺の調査を実施し、第309函・310函の調査成果を、高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺経蔵典籍文書目録』完結篇（汲古書院、2007年）の一部として刊行した。さらに、氷室神社大宮家文書について、奈良市教育委員会との間で協定書を締結し、共同研究を開始した。未成巻文書の調書作成・写真撮影を行ない、成巻文書１巻～10巻のデータベースを作成・公開した。

奈文研所蔵の資料については、「関野貞日記」の翻刻作業を進めているところである。

その他、調査協力の依頼を受けて、滋賀県石山寺聖教調査、文化庁依頼の醍醐寺聖教調査などに協力した。また、文部科学省科学研究費「カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究」に協力し、カンボジアのアンコール・ワットに残る17世紀前期の日本人墨書銘を調査した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では現存建築、古材、発掘遺構・遺物などの現物資料を中心に据えて歴史的建造物及び伝統的建造物群などの調査研究を進めている。

2007年度は受託研究として高知県中芸地区森林鉄道遺構調査（旧魚梁瀬森林鉄道）と京都府近代和風建築総合調査を実施した。高知県中芸地区森林鉄道遺構調査は、明治44年に開設され、昭和38年の魚梁瀬ダム建設を契機に廃止された本森林鉄道を近代化遺産の側面から価値評価をし、国指定を目指すための基礎的調査で、2006年度、2007年度の２ヵ年計画で実施した。調査では、中芸５ヶ町村に跨り所在する路線沿いの軌道・跨線橋・擁壁・隧道・建築物など、計260物件についての現地調査、古地図・書籍等の資料収集などの文献調査をおこない、本森林鉄道の近代化遺産としての価値評価をおこなったうえ、保存・活用の方策について研究し、成果を調査報告書に取り纏めた。

京都府近代和風建築総合調査は、明治以降、昭和20年代までに建設された和風建築を対象として、京都府が文化庁による国庫補助を得て平成18年度から３ヶ年計画で実施している総合調査である。当研究所が受託した本調査は、２年間にわたり計画されている二次詳細調査の１つにあたる。調査に際し、住宅建築、宗教建築、商業建築など153件、214棟をあらかじめ選定し、建物平面の実測、写真撮影等の現地調査のほか、文献調査、関連建物調査等をおこなった。

このほかに、国内では島根県所在の出雲大社境外諸社殿12棟の現地調査を、国外では当研究所が海外関係事業としておこなっているカンボジア・西トップ寺院遺跡の現地調査をおこなった。以上の調査研究の成果は奈文研紀要2008で発表した。

調査研究の一環として研究所保管資料に基づく建造物乾板写真目録、現状変更説明（本文編・図版編の各１冊）の刊行と、同乾板写真のデジタルデータ化を近年継続している。2007年度刊行物として、1965年～1967年分と1968年～1970年分の現状変更目録（各本文編、図版編の分冊）を刊行した。

技術の視点から古代建築の構法を再検証することをテーマとして2006年度に立ち上げた研究では、日韓古代寺院建築の発掘遺構資料を可能な限り収集し、発掘遺構と上部構造の関係の再考を進め、研究成果を2008年３月に開催した研究集会などで発表した。

このほかに、現在進行中の大極殿正殿復原工事に関し、扁額と金具を中心とした詳細意匠の検討のほか、全国各地で実施されている文化財建造物等の修理事業（京都府・二条城建造物、奈良県・正倉院正倉ほか）・史跡等整備事業（愛知県・名古屋城本丸御殿、奈良県・依水園庭園ほか）での修理・復原・整備等に関する援助・助言をおこなった。

●景観研究室の調査と研究

2004年５月の文化財保護法改正により、文化的景観が文化財として位置づけられるようになり、これに対応するため翌2005年４月本研究室が設置された。

2006年度からの５カ年計画の中で、現地調査などを含め具体的に取り組む文化的景観の調査研究対象を高知県内の四万十川流域とした。高知県内同流域１市４町は文化的景観保存活用事業として国の補助事業が開始され、“四万十川流域の文化的景観”として重要文

化的景観の選定を受けるべく準備を進めている。そのうち、四万十市・梼原町については2006年度から、四万十町については2007年度に、それぞれ保存活用事業に関わる受託調査を実施してきた。

四万十市の河川地区では四万十川で行われる伝統漁法の風景、洪水時には水面下に没することがある沈下橋の景観などの現地調査をおこなった。また、最河口部の下田地区は陸運が盛んになる前、流域の物資が舟運によって集積した集落であり、民家の亀甲積みの石垣や煉瓦塀などに栄えた頃の面影をみることができる。河口部で堆積した砂利を用いた“バラスブロック”がかつて作られ、現在も町中に多く残り、独特な景観を呈しており、保存計画を提案した。

梼原町は、四万十川最大の支流、梼原川の中・上流部に位置する山間の町である。河川地区には小規模な沈下橋が分布する。沈下橋が架けられる前は一本橋があり、出水で流されるたび橋桁に橋板を戻すことになるが、戻しやすい水量を計る計り石なども多く残されており、川と生活の関わりがわかる。また、棚田オーナー制度発祥の地となった神在居の棚田の現地調査もおこなった。

四万十町は、四万十川中流部に位置する。ここでは、本流に堰を設けて灌漑をした台地上の水路の調査、舟運の安全を祈願した四万十川最大の中州・三島の調査、国有林の伐採で栄えた集落の調査などをおこなった。

古代庭園に関する研究の５カ年計画全体では、平安時代の庭園を対象にしており、２カ年目である2007年度は平安時代前期の庭園遺構に主眼をおいた研究会を実施した。報告内容は、①嵯峨院（大覚寺）、②冷泉院、③斎宮邸宅、④賀陽親王邸宅・初期高陽院、⑤平安京の貴族邸宅と庭園―前期を中心として―、⑥奈良時代の宮殿・邸宅と庭園、⑦寝殿造邸宅と庭園、である。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室は2006年４月に発足した研究室で、研究員２名で構成されている。

本研究室では、遺跡整備に関する調査・研究をおこなうとともに、整備された遺跡の公開・活用のあり方にも重点を置き、遺跡の保存・整備計画段階から整備後の遺跡の公開・活用にいたるまでの調査研究を進めることを主たる業務としている。

2007年度は、第一には、遺跡の公開・活用面に関する調査研究活動の一環として、保存された遺跡の管理や活用がどのようになされているかについて情報収集を進め、2008年１月に「遺跡の保存管理・公開活用と指定管理者制度」をテーマとし、第２回遺跡整備・活用研究集会を開催した。

この研究集会では、遺跡や文化財施設等における管理・活用に関して2003年度に導入された指定管理者制度の内容、それを導入した遺跡等における公開・活用等の具体例について報告をおこない、指定管理者制度導入の実態や問題点について具体的事例を取り上げながら議論した。

また、前年度に開催した「遺跡の教育面に関する活用」の研究集会の報告・討議内容を報告書として刊行した。

第二には、遺跡の整備手法の一つとしておこなわれている遺構の露出展示に関する調査研究を進めている。今年度は、遺構の露出展示を伴う整備状況についての情報収集を継続するとともに、その問題点の把握と今後のあり方についての検討に着手した。

第三には、本研究室の前身である旧遺跡研究室がまとめた「大規模遺跡の整備・管理・活用に関する調査研究」の成果について、今後の遺跡整備事業における参考資料として情報提供をすべく、独立して起動するデータベース形式でファイルを収納したＣＤを制作・発行した。

このほかに、遺跡活用に関する研究の一環として、景観研究室と共同で「宮中儀礼の復興と文化遺産の活用」をテーマとする講演会を３月に開催し、儀礼や行事などの復原を踏まえた遺跡活用のあり方について検討した。

また、地方公共団体からの依頼により、各地で進められている遺跡の保存・整備・活用にかかわる事業について、援助・助言を継続的におこなっている。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの４研究室では、各研究室の調査・研究を計画的に実施していくとともに、国や地方公共団体等の求めに応じて、専門的な協力と助言をおこなっている。

●保存修復科学研究室の調査と研究

保存修復科学研究室では、出土遺物をはじめ遺跡の公開と活用に資するため、保存科学および保存修復法に関する技術開発と研究をおこなっている。

出土遺物の調査法については、従来から継続しているデジタルラジオグラフィを用いた手法の開発研究を進めており、研究開発段階から応用段階へと進んでいる。特に、コンピューテッドラジオグラフィ（ＣＲ法）やオートラジオグラフィ（ＡＲ法）は、画像処理技術の進歩により将来が期待される方法である。

遺跡の保存整備にあたって、科学的な調査が十分になされているとは言えない現状にあり、当研究室では、遺跡の現状を把握するための劣化診断技術の開発やモニタリング法の実用化を目指した研究を進めている。特に、遺跡の露出保存を目的とした場合は、土壌水分の移動と含水比の変動および遺跡をとりまく気象環境などのデータを正確に把握する必要がある。遺構の安定した露出展示法を確立することを目的として、今後、これらの環境が遺跡の劣化にどのように関与するのか調査を進め、実用的な保存対策のシミュレーションをおこなうことにしている。

一方、外部機関からの受託事業として、「重要文化財黒塚古墳出土鉄製品の事前調査と保存修理」（文化庁）、「漆下遺跡漆関連遺物の調査」（秋田県教育委員会）、「万蔵寺廻り遺跡出土炭化糸の調査」（群馬県教育委員会）、「史跡ガランドヤ古墳の保存整備に伴う環境調査」（日田市教育委員会）、「長野県千曲市社宮司遺跡出土の六角木幢保存修復委託事業」（長野県教育委員会）の５件を実施した。

また、国宝高松塚古墳壁画恒久対策の一環として、高松塚古墳の石室解体をおこない、すべての石材を無事に仮設修理施設に搬入した。

2007年度の保存科学研究集会では、「壁画古墳の保存に関わる諸問題」と題し、高松塚古墳壁画を保存するためにおこなった石室解体と各地域の装飾古墳の保存の現状と課題に関する報告をおこない、わが国の壁画古墳の保存について討論をおこなった。研究集会では、高松塚古墳石室解体に使用した治具や特殊搬送車輌の展示公開、ならびに実大の石材を用いたコロを用いた地切りの実演などもおこなった。

昨年、宮崎において開催した日中韓による「東アジア保存修復国際会議専門家会議」に引き続くものとしてソウルにおいて開催された「東アジア文化遺産保存国際シンポジウム」において日本側事務局を担当した。同シンポジウムでは、「東アジア文化遺産保存学会」が設立され、奈良文化財研究所に本部事務局をおくことが決定された。

●環境考古学研究室の調査と研究

前年度に引き続き、韓国慶南考古学研究所の発掘した金海会蜆（ヘヒョンニ）里貝塚の報告書作成のための指導、協力を継続し、３回韓国を訪問し、12月１日から２月末日まで研究員丁太振（チョン・テジョン）氏を貝塚研究の研修のために奈良文化財研究所に受け入れた。金海貝塚の出土動物遺存体の整理によって、前１世紀には石器はほとんど用いられず、金属器に置き換わっていたことと、それにもかかわらず、金属器自体の出土がほとんど見られないことを明らかにすることができ、今後の日本の弥生文化との対比に大きな成果となる。７月に中国河南省で開催された考古科学国際会議に出席し、居徳遺跡出土の動物骨、人骨に見られる傷跡について発表をおこない、河南省出土の動物遺存体、骨角器の観察をした。その結果、青銅器時代の利器の鋭さを確認し、鉄器と遜色ないことがわかった。９月には米国オレゴン州のコロンビア川河畔のサンケン・ビレッジ遺跡の発掘に参加し、水漬けのドングリ貯蔵穴を発掘し、縄文文化のそれとの共通性を論じる資料を得ることができた。第１次中期計画の成果品、『動物考古学の手引き』とその英文編 *Fundamentals of Zooarchaeology in Japan and East Asia*とを、日本学術振興会科学研究費補助金（研究成果公開促進費）を受け、『動物考古学―*Fundamentals of Zooarchaeology in Japan*』として、日英併記で京都大学学術出版会から公刊することができた。

大分県埋蔵文化財センターの発掘した大友宗麟館跡から出土した動物遺存体および骨角器の分析、報告を行い、従来、民俗例でしか知られていなかった、銜を使わず、鼻を挟む棒の締め付けの強弱で馬を制御する馬具、オモゲーが、中世に鹿角製品として存在したことを証明することができた。また、同様の馬具が２年前に調査した英国シェットランド諸島の泥炭切り出しに従事していたポニーにも使われていたことを見出し、ユーラシア大陸の東西端で同様の馬具が使われていたことを明らかにできた。

●年代学研究室の調査と研究

考古学関連　7府県下9遺跡から出土した木材試料の年輪年代調査を実施した。なかでも、青森市新田（1）遺跡出土の井戸枠の年輪年代調査では、調査対象とした30点の部材の中に樹皮直下の木材組織を残すものがあり、1372年に伐採されたヒバ材が井戸枠に使用されていたことが明らかになった。

建築史関連　国宝1棟・重文2棟を含む7府県下8棟の建造物に対して、年輪年代調査を実施した。特筆すべきは、長野県大桑村の池口寺薬師堂解体修理にともなう年輪年代調査である。調査対象とした17点の部材の中に面皮つきの板材が含まれており、1289年に伐採されたヒノキ材が用いられていることが明らかになった。

美術史関連　国宝3点・重文1点を含む6府県下の26躯の木彫像ならびに4点の工芸品に対して年輪年代調査を実施した。特筆すべきは、滋賀県栗東歴史民俗博物館に寄託されている重文善勝寺千手観音立像の年輪年代調査である。従来、美術史的な所見から10世紀末から11世紀初期の造像と見られていたところ、年輪年代調査によって1010年を上限とする11世紀初期のものであることが明らかになり、造像時期を絞り込むことになった。

埋没樹幹関連　滋賀県甲南町で発見されたヒノキの埋もれ木に対して年輪年代調査を実施し、664年に伐採されたヒノキ樹幹であることが明らかになった。甲賀杣の存在を示す資料として貴重な成果である。

技術開発・国際協力関連　当研究室で世界に先駆けて開発したマイクロフォーカスX線CT装置を用いた非破壊による年輪年代測定技術は、文化財における年輪年代調査の可能性を拡大する画期的なものとして海外の研究者からも高く評価されている。ウィーン天然資源・応用生命科学大学との共同研究として、世界遺産に指定されているオーストリアのハルシュタットから出土した青銅器時代、鉄器時代、およびラテン時代の木製品30点に対して、当研究所にて非破壊年輪年代調査を実施した。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室は、2006年4月の機構改編により、遺跡およびその調査法の研究と文化財の調査技術の開発・応用を主要な業務とする研究室として再出発した。過去に存在した集落遺跡、測量、発掘技術、遺跡調査技術、遺物調査技術の各研究室の伝統と蓄積を継承した研究の推進を目的としている。

2007年度は、遺跡およびその調査法の領域では、前年度にひきつづき、古代の官衙関連遺跡と豪族居宅遺跡などの資料を収集整理するとともに、遺跡の性格を認定するための指標や、発掘調査で抽出すべき基本的属性についての研究をおこなった。収集・補訂した資料はデータベース化し、遺跡の性格や所在地、文献目録、おもな遺構と遺物、建物の詳細データと、地図や遺跡全体図、建物図面などの画像データを、奈良文化財研究所のホームページ上で公開している。

また、前年度の研究集会で扱った古代の豪族居宅の構造と機能についての研究を進め、論文報告集を刊行したほか、国・郡（評）・里制成立の画期と在地社会における意味をめぐり、「古代地方行政単位の成立と在地社会」のテーマで研究集会を開催した。さらに、文化庁の委託を受けて『発掘調査のてびき』の作成作業にもあたっている。

一方、文化財の調査技術の領域では、測量、計測、探査を中心に活動をおこなった。測量分野では、国内の埋蔵文化財担当者を対象とする平城宮での研修のほか、ベトナムのタンロン皇城での測量と現地研究者への実地研修を実施した。計測分野では、中国遼寧省などで三次元デジタイザとデジタル写真を用いた遺構・遺物の三次元計測をおこない、第2回DDCH（文化遺産のデジタルドキュメンテーションと利活用に関するワークショップ）を主催した。また、探査分野では、平城宮や藤原宮のほか、地方公共団体と連携・共同して、地中レーダ探査、電気探査、磁気探査、電磁探査を日本各地でおこなった。これらの調査技術は、いずれも文化財の詳細かつ多様な情報取得手段として重要であり、より効率的な作業と分析方法の確立が望まれる。今後、実際の調査過程への導入を視野に入れつつ、関係機関等と連携して研究を進めていきたい。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、現在、中国、韓国、カンボジアの3ヵ国の研究機関と以下の項目に述べるような学術共同研究を実施している。このほか、アフガニスタンとイラクを対象とする西アジア諸国等文化遺産保

存修復協力事業や2006年６月に発足した文化遺産国際協力コンソーシアム（事務局は東京文化財研究所に設置）のおこなう支援協力事業にも協力している。2007年度の各事業の概要は以下の通りである。

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

2007年度は、まず漢長安城桂宮跡の日本語版発掘調査報告書作成に着手した。2007年に出版された中国語版発掘調査報告書『漢長安城桂宮』の翻訳作業を進め、本格的な編集作業のための準備に取りかかった。報告書は2008年度に編集作業をおこない2009年度に刊行する計画である。また、唐長安城太液池跡の発掘調査報告書作成に向けて、昨年度に引き続き遺物調査をおこなった。９月に４名の研究員を西安市に派遣し太液池跡出土の陶磁器、石造物、瓦磚類、金属製品を調査し、写真撮影を実施するとともに、西安市碑林博物館に所蔵されている石製灯籠など関連する資料の調査と写真撮影をおこなった。

漢魏洛陽城跡については、７月と11月に延べ４名の研究員を北京と洛陽市に派遣し調査研究方針などについて協議した。その後、日中共同発掘調査の申請が中国国務院により批准されたことを受けて、３月に中国社会科学院考古研究所の王所長他２名の研究員を招聘して、2008年度からの日中共同発掘調査に関する協議書を取り交わし、2008年度の洛陽城宮城跡における具体的な共同発掘調査計画を協議した。また、共同発掘調査のために必要な測量等の関連する準備作業をおこなった。

●遼寧省文物考古研究所との共同研究

2006年度から始まった共同研究「朝陽地区隋唐墓の整理と研究」の２年目である。2007年度は10月に６名、３月に８名の研究員を派遣して、出土した墓誌によって年代が明らかな楊律墓、勾竜墓、左才墓、韓相墓、孫黙墓、韓貞墓をはじめとする、計15基の唐代の墓から出土した鏡、帯金具、土器、陶俑等の遺物について共同調査をおこなった。調査は前年度と同様、観察、調書作成、実測および写真撮影で、複雑な形状を呈する陶俑等については、３次元デジタイザを用いて効率的にデータを取得した。これまでの調査で、同じ笵から作られた陶俑でも、工人差とでもいうべき製作技法の違いが存在することが明らかになりつつある。このほか、３月の調査では、次年度に予定している陶俑に施された彩色等の理化学的分析に向けての予備的な調査もおこなった。

これに対し、11月には遼寧省から６名の研究員を招聘し、関連する遺跡・遺物の共同調査を実施した。

また、天理大学附属天理参考館が所蔵する武士俑、武官俑、文吏俑等の陶俑のなかに、中国遼寧省蔡須達墓出土陶俑のいくつかと酷似するものがあることが判明した。この資料に関しては、比較研究のため、２月に天理参考館の協力を得て、観察・調書作成および写真撮影をおこなった。

●河南省文物考古研究所との共同研究

2005年度からの第二期共同研究を継続。中国側が主導する発掘調査は、第一期の主対象である鞏義市大・小黄冶地区の南上流、白河・水地河地区に移った。水地河地区は白磁の窯跡として広く知られる地域であるが、発掘に先立つ聞き取り、踏査、ボーリング調査によって、川の両岸で唐三彩生産に関わる遺物が確認されていた。水地河地区における発掘調査は、唐三彩生産の範囲、大・小黄冶地区との関係、白磁生産と唐三彩生産との関係など鞏義の唐三彩生産の全体像把握に欠かせないものである。2007年度は発掘調査の最終年度として、2006年度調査区（Ⅲ区）を周辺に拡大する形で６つのトレンチを設けて実施し、調査面積は1200㎡に及ぶ。調査では新たに３基の窯跡や多数の土坑を発見し、北朝青磁、唐三彩、窯具など大量の遺物が出土した。特筆すべきは、唐三彩の大型俑（馬）の発見である。墳墓から数多く発見される大型の俑は種々の特徴から鞏義の製品と目されながら、黄冶地区を含めて調査では確認されていなかった。ここに調査の重要課題の一つを解明する手懸りを得たことになる。また、唐青花瓷の発見により鞏義窯での唐青花生産が実証され、北魏の青磁、白磁の窯跡からの発見は、早期白磁の起源研究にとって重要な実物資料となるなど、多くの重要な成果が得られた。

５～６月には日本側研究員６名を派遣。水地河地区の発掘現場を参観するとともに、鞏義における北朝陶磁器の参考資料として、河南省北部で発掘中の北朝の墳墓群とその出土遺物、河北省磁州窯博物館などを見学し、近年の発掘調査で安陽市相州窯から出土した飛鳥地域出土の鉛釉高杯に類似した高杯などを熟覧し

た。10月には中国側研究者５名を招聘し、趙志文「河南鞏義黄冶・白河窯跡2005・2006年度発掘成果報告」、賈連敏「近年の河南省考古重要新発見」の成果報告会を開催して学術交流を深めた。12月には日本側から３名の研究者が訪華。水地河地区における発掘の最終段階を確認した。これには飛鳥資料館学芸員ほかが同行し、来年度に開催予定の企画展「鞏義黄冶窯唐三彩展（仮称）」の準備作業をおこなった。なお、2008年３月に黄冶地区における唐三彩窯跡の発掘調査概要の中文版が『華夏考古』誌上に発表された。

●韓国国立文化財研究所との共同研究

大韓民国国立文化財研究所とは、2005年12月より「日本の古代都城並びに韓国古代王京の形成と発展過程に関する共同研究」という課題のもとに共同研究をすすめている。2007年度は合意書にもとづき、前年度までの共同研究成果を『日韓文化財論集Ⅰ』（奈良文化財研究所学報第77冊）として出版した。本書には、研究細目として掲げた４テーマに則した都城制・庭園史・考古資料・古建築・遺跡整備などに関する12篇の論文を収録した。また、本書は日韓同時出版とし、韓国語版『韓日文化財論集Ⅰ』を韓国国立文化財研究所より出版している。

2008年３月には、次年度以降の共同研究についての協議を主目的として研究者の韓国派遣をおこない、合わせて国立加耶文化財研究所において咸安城山山城出土木簡の調査、同現地見学、国立扶余文化財研究所・国立扶余博物館において扶余王興寺址現地見学・出土資料見学等を実施し、意見交換をおこなった。

2006年度より開始した国立慶州文化財研究所との発掘調査交流では、日本側からは研究員を２か月間、同研究所に派遣し、慶州四天王寺址および月城垓子の発掘調査に参加するとともに、資料調査、学会出席、口頭発表をおこなった。韓国側からは、２名の研究員が延べ２か月間当研究所に滞在し、飛鳥甘樫丘東麓遺跡、平城宮第二次朝堂院東方官衙地区の発掘調査に参加し、合わせて都城関連遺跡、古代寺院遺跡の視察をおこなった。

●西アジア諸国の文化財修復保存協力事業

アフガニスタン、イラクを対象とする文化遺産保存修復協力事業であり、東京文化財研究所と共同で実施している。

アフガニスタンに対しては、世界遺産バーミヤーン仏教遺跡群の保存修復協力を実施している。この事業では、遺跡の範囲確認に重点を置き、本年度も遺構の広がりを把握するために、西大仏の南西にあたる平地部分での試掘調査を続行し、土壁及び石積みの基底部と考えられる遺構を検出した。また、発掘区内の堆積物に対する花粉分析の他、土器の整理作業、石窟の詳細な測量や壁画の保存処置もおこなわれている。

イラクに対する緊急援助事業は、本年度も現地の専門家４名を日本に招聘して実施し、奈良文化財研究所では、水浸出土木材の保存処理全般についての研修をおこなった。

●カンボジアAPSARAとのアンコール遺跡群西トップ寺院の共同研究

2002年度の覚書調印によって、アンコール・トム内の西トップ寺院を対象とした４カ年計画が発足し2005年度で第一フェイズの調査を終了した。その後2006年度に新たに覚え書きを交わし第二次フェイズとして新たな調査をおこなってきた。

現地調査は８月と12月におこなった。いずれも中央祠堂の地下構造把握のために、中央祠堂の周囲にトレンチを設けて発掘調査をおこなった。８月には中央祠堂西側で調査をおこなった。12月には中央祠堂東側の北小塔東側で調査をおこなった。これらの調査によって、まず中央祠堂には現段階では掘り込み地業が確認されないことが明らかとなった。さらに大きく２層の整地土層があり、下層からは12世紀代の中国陶磁が、上層からは14世紀代の中国陶磁が発見された。特に今見る中央祠堂の地覆石は上層の整地土層にのっており、その時期としては14世紀以降に下るという結果となった。

招聘事業では３月に王立芸術大学を卒業した若手研究者２名を招聘し、研究所の視察や、奈良・京都の世界遺産の視察をおこなった。また７月と12月にはユネスコが主催する、国際調整委員会に出席し、事業の概要を説明した。

また2007年度も科学研究費補助金の特別推進研究「カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究」に協力するとともに、前年度より始まった大阪大谷大学のクナポ窯跡調査への協力をおこなった。

海外からの主要訪問者一覧

●中華人民共和国／中国吉林省文物考古研究所 副所長 宋玉彬　外４人／07.4.19／渤海西古城遺跡研究報告会、平城京出土渤海関係遺物見学、平城京視察

●ベトナム社会主義共和国／ハタイ省文化遺産管理事務所 管理専門官 Le Liem　外２名／07.8.28～8.31、9.6,7,26／文化遺産保護に資する研修2007（ACCU個人研修・ベトナム）（講義名（講師名）：文化財修理技法概説（窪寺）、町並・集落保存概説（島田）、町並保存の実務Ⅰ（清水）、町並保存の実務Ⅱ（大林）、町並保存の実務Ⅲ（島田）レポート作成（島田））受講

●ベトナム社会主義共和国／ベトナム文化情報省文化遺産局 副局長 グゥエンコクフン　外１名／07.9.26／所長表敬訪問

●イラク共和国／イラク国立博物館中央修復研究室　保存修復技術者　Faeza M.Junaah　外３名／07.11.19～12.2／イラク人保存科学研修（ユネスコ・イラク／西アジア）（内容：木製品の保存修復）

●中華人民共和国／中国ユネスコ国内委員会プログラム担当官　HOU Jian／07.11.16／見学及び意見交換等

●大韓民国／韓国ユネスコ国内委員会 財政課長 HWANG Tae-hak／07.11.16／見学及び意見交換等

●タイ王国／タイユネスコ国内委員会 対外関係官 YAMOLANAN Komutee／07.11.16／見学及び意見交換等

●ドイツ連邦共和国／ドイツユネスコ国内委員会パブリック・プライベートパートナーシップ長 Stefan RENNICKE／07.11.16／見学及び意見交換等

●フィリピン共和国／フィリピンユネスコ国内委員会開発マネジメント担当官 Emmy Anne B.YANGA／07.11.16／見学及び意見交換等

●大韓民国／羅周国立文化財研究所　研究者 曺美順　外２名／07.11.23／平城宮跡視察

●大韓民国／慶南考古学研究所 チョン タジン／07.12.1～08.2.29／金海貝塚出土の動物骨の同定の研修受講

●モルディヴ共和国／国立言語・歴史研究センター研究員　HAFIZ　ALI　外１名／07.12.3～12.7／文化遺産に資する研修2007（ACCU個人研修）（博物館実務研修の一部を担当：飛鳥資料館（杉山外）講義名：遺物収蔵・借用の実務Ⅰ・Ⅱ、展覧会準備の実際、臨地講義）受講

●中華人民共和国／中央研究院歴史語言研究所考古学問　助理研究員　邱敏勇（Min-yung Chiu）／07.12.3～12.13／動物考古学の研修受講

●大韓民国／韓国国立全南大学　教授 鄭雨陽　外２名／07.12.17～12.19／施設見学・意見交換

●オーストリア共和国／ウィーン天然資源・応用生命科学大学 材料科学・処理工学科 木材科学技術研究所 博士 ミヒャエル・グラブナー／08.2.5～2.23／「青銅器時代および鉄器時代のオーストリーハルシュタットの木器の年輪年代測定」に関する共同研究

●中華人民共和国／太原市文物考古研究所所長　李非　外１名／08.2.22／高松塚壁画保存研究状況など視察

●ケニア共和国／世界遺産委員会ケニア代表団団長　ジョージ・アブング／08.3.21／平城宮跡視察

海外からの招聘者一覧

●華玉冰（Hua　Yubing）（遼寧省文物考古研究所副所長）／中華人民共和国／07.11.6～11.17

●方殿春（Fang Dianchun）（遼寧省文物考古研究所研究員）／中華人民共和国／07.11.6～11.17

●白宝玉（Bai　Baoyu）（遼寧省文物考古研究所考古隊員）／中華人民共和国／07.11.6～11.17

●徐韶鋼（Xu　Shaogang）（遼寧省文物考古研究所考古隊員）／中華人民共和国／07.11.6～11.17

●熊増瓏（Xiong Zenglong）（遼寧省文物考古研究所考古隊員）／中華人民共和国／07.11.6～11.17

●呉炎亮（Wu　Yanliang）（遼寧省文化庁文物処処長）／中華人民共和国／07.11.6～11.17

●焦南峰（Jiao　Nanfeng）（陝西省考古研究院長）／中華人民共和国／07.11.1～11.10

●司治平（si　zhi　ping）（河南省文物管理局文物処長）／中華人民共和国／07.10.21～10.31

●賈連敏（Jia　Lian　Min）（河南省文物考古研究所副所長）／中華人民共和国／07.10.21～10.31

●丁清旭（ding　qing　xu）（河南省政府办公庁四処副主任科員）／中華人民共和国／07.10.21～10.31

●趙志文（zhao　zhi　wen）（河南省文物考古研究所副研究員）／中華人民共和国／07.10.21～10.31

●李秀萍（Li Xiu Ping）（河南省文物考古研究所研究館員）／中華人民共和国／07.10.21～10.31

●襄秉宣（韓国国立文化財研究所建造物研究室長）／大韓民国／07.9.5～9.7

●姜賢（韓国国立文化財研究所建造物研究室研究員）／大韓民国／07.9.2～9.6

●李容準（韓国国立文化財研究所建造物研究室研究員）／大韓民国／07.9.2～9.6

●沈陽（中国文物研究所古代建築与古跡保護中心高級工程師）／中華人民共和国／07.9.2～9.6

●丁燕（中国文物研究所古代建築与古跡保護中心高級工程師）／中華人民共和国／07.9.2～9.6

●陳青（中国文物研究所文物保護科技中心副研究員）／中華人民共和国／07.9.2～9.6

●安家瑶（中国社会科学院考古研究所西安研究室主任）／中華人民共和国／07.11.27～12.4

●楊勇（中国社会科学院考古研究所助理研究員）／中華人民共和国／07.11.27～12.4

●何歳利（中国社会科学院考古研究所助理研究員）／中華人民共和国／07.11.27～12.4

●Lam　Sopheak（奈良文化財研究所カンボジア事業現地事務所長）／カンボジア王国／08.1.28～2.3

●Loeung Ravattey（奈良文化財研究所カンボジア事業現地事務所総括担当）／カンボジア王国／08.1.28～2.3

●李柱憲（韓国国立慶州文化財研究所学芸研究官）／大韓民国／08.1.21～2.10

●兪洪植（韓国国立慶州文化財研究所研究員）／大韓民国／08.2.11～3.9

●王巍（中国社会科学院考古研究所所長）／中華人民共和国／08.3.12～3.17

●朱岩石（中国社会科学院考古研究所漢唐研究室主任）／中華人民共和国／08.3.12～3.18

●銭国祥（中国社会科学院考古研究所研究員）／中華人民共和国／08.3.12～3.18

●Heang　Sophal（プノンペン王立芸術大学卒業生）／カンボジア王国／08.3.22～3.28

●Huot　Nora（プノンペン王立芸術大学卒業生）／カンボジア王国／08.3.22～3.28

●安泰旭（韓国文化財保護財団文化事業室長）／大韓民国／08.3.26～3.30

奈文研研究者の海外渡航一覧

●金田　明大：ドイツ連邦共和国／07.4.2～4.8／国際学会ＣＡＡ(Computer Applications and Quantitative methods in Archaeology)での発表及び参加／運営費交付金

●松井　章：大韓民国／07.4.15～4.18／金海貝塚出土動物遺存体の研究指導／先方負担

●窪寺　茂：中華人民共和国／07.4.18～4.22／中日韓古建築模型学術交流活動準備会議への出席（中国文物研究所からの招聘）、建造物研究室特別研究「古代建築の構法」研究に関する現地視察／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●箱崎　和久：中華人民共和国／07.4.18～4.22／中日韓古建築模型学術交流活動準備会議への出席（中国文物研究所からの招聘）、建造物研究室特別研究「古代建築の構法」研究に関する現地視察／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●加藤　真二：中華人民共和国／07.4.22～4.27／平成20年度秋期特別展開催に関する調整・調査／運営費交付金

●西田　紀子：中華人民共和国／07.4.22～4.27／平成20年度秋期特別展開催に関する調整・調査／運営費交付金

●島田　敏男：ベトナム社会主義共和国／07.4.29～5.5／文化庁が行っているベトナムへの集落保存協力の一環としての現地協議／他機関負担

●西口　壽生：中華人民共和国／07.5.17～5.27／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●玉田　芳英：中華人民共和国／07.5.17～5.27／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●森川　実：中華人民共和国／07.5.17～5.27／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●小田　裕樹：中華人民共和国／07.5.17～5.27／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●川越　俊一：中華人民共和国／07.5.22～5.27／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●巽　淳一郎：中華人民共和国／07.5.22～5.27／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●内田　和伸：中華人民共和国／07.5.24～5.30／大極殿院の思想と文化に関する研究のため（儒教建築の構成と活用に関する調査研究）／科研費

●森本　晋：ロシア連邦／07.5.27～6.5／電子文化地図学会に出席・発表／運営費交付金

●松井　章：大韓民国／07.5.28～6.1／慶南考古学研究所において金海貝塚出土動物遺存体の研究指導／科研費

●石村　智：アフガニスタン・イスラム国／07.6.8～7.14／バーミヤーン遺跡の調査／運営費交付金

●森本　晋：アフガニスタン・イスラム国／07.6.9～6.20／バーミヤーン遺跡の調査／運営費交付金

●森本　晋：ニュー・ジーランド／07.6.21～7.3／第31回世界遺産委員会出席／他機関負担

●関広　尚世：エジプト・アラブ共和国／07.6.12～6.20／ヌビア文化の研究に関する遺跡・博物館の見学／私費（研修）

●杉山　洋：カンボジア王国／07.6.18～6.22／西トップ寺院の調査研究／運営費交付金

●岡村　道雄：カンボジア王国／07.7.3～7.7／西トップ寺院の調査研究／運営費交付金

●安田　龍太郎：カンボジア王国／07.7.3～7.7／西トップ寺院の調査研究／運営費交付金

●杉山　洋：カンボジア王国／07.7.3～7.7／西トップ寺院の調査研究／運営費交付金

●森本　晋：カンボジア王国／07.7.4～7.7／アンコール遺跡保存国際調整委員会出席／運営費交付金

●金井　健：アメリカ合衆国／07.7.12～11.16／フルブライト交流プログラム海外研究歴史的建造物保存の方策と実践に関する研究／フルブライト交流プログラム

●松井　章：中華人民共和国／07.7.12～7.17／動物考古学会「Chinese perspectives and global developments」に出席、発表、研究討議。遺跡出土骨の観察及び記録、中国研究者との研究討議／科研費

●石村　智：カンボジア王国／07.7.17～7.27／西トップ寺院の調査研究／運営費交付金

●豊島　直博：カンボジア王国／07.7.17～7.27／西トップ寺院の調査研究／運営費交付金

●杉山　洋：カンボジア王国／07.7.17～7.27／「カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究」現地調査／科研費

●加藤　真二：大韓民国／07.7.18～7.23／古墳壁画（獣頭人身十二支像）の調査・研究／運営費交付金

●山中　敏史：大韓民国／07.7.24～7.26／大韓民国国立文化財研究所が主催する研修教育で講演／先方負担

●山崎　信二：中華人民共和国／07.7.26～7.28／中国社会科学院考古研究所との共同研究／運営費交付金

●小池　伸彦：中華人民共和国／07.7.26～7.28／中国社会科学院考古研究所との共同研究／運営費交付金

●今井　晃樹：中華人民共和国／07.7.26～7.28／中国社会科学院考古研究所との共同研究／運営費交付金

●石村　智：サモア独立国／07.8.4～8.13／サモア独立国における考古学調査・ワークショップの開催／福武学術文化振興財団助成金

●杉山　洋：カンボジア王国、タイ王国／07.8.15～8.22／西トップ寺院の調査研究、タイ国内クメール遺跡の視察／運営費交付金

●丹羽　崇史：中華人民共和国／07.8.18～8.28／青銅器および鋳造関連遺物の調査／高梨学術奨励基金

●石村　智：スウェーデン王国／07.8.19～8.27／スウェーデン・ゴットランド大学における国際学会「VII International conference : Easter Island and the Pacific」で研究発表／科研費

●平澤　毅：ベトナム社会主義共和国、中華人民共和国／07.8.21～8.31／ベトナム・ハロン湾の文化的景観に関する現地調査、ベトナム・中国国境地帯少数民族居住地の文化的景観の現地調査／他機関科研費

●橋本　裕子：ヨルダン・ハシミテ王国／07.8.21～9.25／発掘調査／科研費

●山崎　信二：中華人民共和国／07.8.25～8.31／中国の南朝および隋唐代の瓦調査／運営費交付金

●石田　由紀子：中華人民共和国／07.8.25～9.5／中国の南朝および隋唐代の瓦調査／運営費交付金

●小澤　毅：中華人民共和国／07.8.25～9.5／古代東アジアの造瓦技法の比較検討／科研費

●黒坂　貴裕：大韓民国／07.9.2～9.7／第4回日韓文化財建造物保存協力協議会／文化庁

●森本　晋：チェコ共和国／07.9.3～9.10／ヨーロッパコンピュータグラフィクス学会文化遺産分科会出席／運営費交付金

●高瀬　要一：フィリピン共和国／07.9.5～

9.10／世界遺産フィリピンコルディラ棚田の保存管理の現状と課題調査／運営費交付金

●松井　章：インドネシア共和国／07.9.6～9.11／イノシシの調査／他機関科研費

●大河内　隆之：タイ王国／07.9.8～9.17／国際学会（The First Asian Dendrochronology Conference and Workshop)）に出席、及び発表のため／運営費交付金

●金田　明大：スロバキア共和国／07.9.10～9.17／国際遺跡探査学会発表のため／運営費交付金

●西村　康：スロバキア共和国／07.9.10～9.17／国際遺跡探査学会発表のため／運営費交付金

●高瀬　要一：大韓民国／07.9.12～9.15／大韓民国国立文化財研究所主催「第16回文化財研究学術大会」に参加・発表／先方負担

●松井　章：アメリカ合衆国／07.9.14～9.28／北西海岸先史文化のオレゴン州サンケン・ビレッジ遺跡の発掘に参加し、縄文文化に関する情報の供与と、発掘技術の指導を行う／科研費

●吉川　聡：中華人民共和国／07.9.17～9.21／中国雲南省イ族土地関係文書料紙調査／他機関科研費

●和田　一之輔：中華人民共和国／07.9.17～9.28／太液池出土遺物の調査／運営費交付金

●今井　晃樹：中華人民共和国／07.9.17～9.28／太液池出土遺物の調査／運営費交付金

●廣瀬　覚：中華人民共和国／07.9.17～9.28／太液池出土遺物の調査／運営費交付金

●牛嶋　茂：中華人民共和国／07.9.17～9.28／太液池出土遺物の調査／運営費交付金

●中川　あや：大韓民国／07.9.18～11.15／慶州国立文化財研究所との研究交流／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●杉山　洋：アメリカ合衆国／07.9.21～9.27／アメリカ所在のクメール陶器の調査研究及びスミソニアン研究機構においてクメール陶器に関する意見交換を行うため／私費（研修）

●降幡　順子：アメリカ合衆国／07.9.22～10.1／第4回フォーブスシンポジウム参加・発表／科研費

●児島　大輔：中華人民共和国／07.9.25～10.3／河南省龍門石窟における調査のため／科研費

●金田　明大：ギリシャ共和国／07.10.1～10.8／CIPA国際シンポジウム出席／運営費交付金

●肥塚　隆保：中華人民共和国／07.10.3～10.5／石造文化財の劣化状態調査法に関する研究会／科研費

●高妻　洋成：中華人民共和国／07.10.3～10.5／石造文化財の劣化状態調査法に関する研究会／科研費

●村上　隆：ドイツ連邦共和国／07.10.3～10.12／国際会議における招待講演、科学研究費による調査・研究／先方負担（内10.8～12滞在費：他機関科研費）

●松井　章：大韓民国／07.10.10～10.13／韓国慶南考古学研究所において金海貝塚出土動物遺存体の研究指導／科研費

●小林　謙一：中華人民共和国／07.10.10～10.13／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費

●金田　明大：中華人民共和国／07.10.10～10.17／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費

●小池　伸彦：中華人民共和国／07.10.10～10.20／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費

●牛嶋　茂：中華人民共和国／07.10.10～10.20／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費

●豊島　直博：中華人民共和国／07.10.13～10.20／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費

●小澤　毅：大韓民国／07.10.13～10.17／新羅の都城と寺院の立地に関する資料収集／科研費

●加藤　真二：大韓民国／07.10.22～10.26／慶州における獣頭人身十二支像の調査と写真撮影／運営費交付金

●井上　直夫：大韓民国／07.10.22～10.26／平成20年度飛鳥資料館特別展「キトラ古墳壁画異貌の十二支神像」展における展示、及び図録用写真撮影／運営費交付金

●岡田　愛：大韓民国／07.10.22～10.26／平成20年度飛鳥資料館特別展「キトラ古墳壁画十二支－子・丑・寅－」展における展示、及び図録用写真撮影／運営費交付金

●松井　章：中華人民共和国／07.10.28～11.4／遺物調査、田螺山遺跡関連資料の収集、余姚田螺山遺跡出土品の調査／他機関科研費

●田辺　征夫：大韓民国／07.10.31～11.2／2007年東アジア文化遺産保存シンポジウムへ出席／先方負担

●森本　晋：カンボジア王国／07.10.31～11.3／西トップ寺院関係資料の調査／科研費

●杉山　洋：カンボジア王国、中華人民共和国／07.10.31～11.8／ソサイ窯跡出土土器の調査、東南アジア陶磁器の視察／科研費

●清水　重敦：大韓民国／07.11.1～11.4／大韓民国における文化遺産のオーセンティシティに関する現地調査／科研費

●肥塚　隆保：大韓民国／07.11.1～11.5／東アジア文化遺産保存シンポジウムへの出席（研究発表）ならびに石造文化財の劣化状態調査法に関する資料収集／先方負担

●高妻　洋成：大韓民国／07.11.1～11.5／東アジア文化遺産保存シンポジウムへの出席（研究発表）ならびに石造文化財の劣化状態調査法に関する資料収集／科研費

●降幡　順子：大韓民国／07.11.1～11.5／東アジア文化遺産保存シンポジウムへの出席（研究発表）ならびに石造文化財の劣化状態調査法に関する資料収集／科研費

●脇谷　草一郎：大韓民国／07.11.1～11.5／東アジア文化遺産保存シンポジウムへの出席（研究発表）ならびに石造文化財の劣化状態調査法に関する資料収集／科研費

●小澤　毅：大韓民国／07.11.1～11.10／古代東アジアの造瓦技法の比較検討／科研費

●高田　貫太：大韓民国／07.11.1～11.10／古代東アジアの造瓦技法の比較検討／科研費

●林　正憲：大韓民国／07.11.4～11.10／古代東アジアの造瓦技法の比較検討／科研費

●箱崎　和久：中華人民共和国／07.11.7～11.16／河北省における塔婆建築を中心とした古建築の構造と意匠に関する調査／科研費

●今井　晃樹：中華人民共和国／07.11.20～11.23／洛陽との共同研究のための事前調査／運営費交付金

●杉山　洋：カンボジア王国／07.11.26～11.30／国際会議出席と西トップ寺院の調査成果発表／運営費交付金

●石村　智：フィジー諸島共和国／07.11.29～12.12／フィジー諸島共和国、ボウレワ・ラピタ遺跡の発掘調査／科研費

●玉田　芳英：中華人民共和国／07.12.5～12.11／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●森川　実：中華人民共和国／07.12.5～12.11／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●降幡　順子：中華人民共和国／07.12.5～12.11／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●加藤　真二：中華人民共和国／07.12.5～12.19／河南省鄭州・洛陽における唐三彩・十二支俑の写真撮影、山西省太原における十二支壁画の調査／運営費交付金
●牛嶋　茂：中華人民共和国／07.12.5～12.19／河南省鄭州・洛陽における唐三彩・十二支俑の写真撮影、山西省太原における十二支壁画の調査／運営費交付金
●森本　晋：フランス共和国／07.12.5～12.13／フランス極東学院所蔵、西トップ寺院関連資料の調査／運営費交付金
●肥塚　隆保：ベトナム社会主義共和国／07.12.9～12.14／ベトナム・タンロン遺跡の保存に関する調査／他機関負担
●高妻　洋成：ベトナム社会主義共和国／07.12.9～12.14／ベトナム・タンロン遺跡の保存に関する調査／他機関負担
●豊島　直博：大韓民国／07.12.12～12.14／「弥生・古墳時代における日韓墳墓出土鉄製武器の比較研究」に関する資料調査／科研費
●田辺　征夫：大韓民国／07.12.16～12.19／古代都城遺跡発掘現場交流の状況および今後の推進の仕方につての協議／先方負担
●安田　龍太郎：大韓民国／07.12.16～12.19／古代都城遺跡発掘現場交流の状況および今後の推進の仕方につての協議／先方負担
●松村　恵司：大韓民国／07.12.16～12.19／古代都城遺跡発掘現場交流の状況および今後の推進の仕方につての協議／先方負担
●吉川　聡：カンボジア王国／07.12.17～12.21／アンコールワット遺跡所在日本人墨書銘の調査／科研費
●杉山　洋：カンボジア王国／07.12.17～12.27／ソサイ窯跡の調査研究／科研費
●井上　直夫：カンボジア王国／07.12.17～12.27／ソサイ窯跡より出土した遺物及び窯跡の空撮のため／科研費
●林　正憲：カンボジア王国／07.12.17～12.27／西トップ寺院の調査／運営費交付金
●石村　智：カンボジア王国／07.12.17～12.27／西トップ寺院の調査／運営費交付金
●島田　敏男：カンボジア王国／08.1.21～1.26／西トップ寺院の調査／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／08.1.21～1.26／アンコール遺跡群共同研究西トップ寺院調査／運営費交付金
●清水　重敦：カンボジア王国／08.1.21～1.26／アンコール西トップ寺院遺跡の建造物調査／運営費交付金
●窪寺　茂：大韓民国／08.1.22～1.24／韓国国立全南大学校主催のシンポジウムで発表（招聘）／先方負担
●杉山　洋：カンボジア王国／08.2.7～2.16／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査のため／運営費交付金
●森本　晋：アルメニア共和国／08.2.9～2.17／壁画遺構の保全状況調査／運営費交付金
●馬場　基：大韓民国／08.2.12～2.14／国際シンポジウム「古代東亜細亜世界の物流と木簡」報告のため／先方負担
●小澤　毅：ベトナム社会主義共和国／08.2.19～2.25／タンロン皇城遺跡発掘調査支援／他機関負担
●井上　和人：ベトナム社会主義共和国／08.2.19～3.1／タンロン皇城遺跡発掘調査支援／他機関負担
●小田　裕樹：大韓民国／08.2.25～2.29／扶余・慶州地域における火葬墓関連資料、遺跡の調査／科研費
●次山　淳：大韓民国／08.3.7～3.9／日韓共同研究の一環として、国立加耶文化財研究所における咸安城山山城出土木簡の見学ならびに研究交流をおこなうため／運営費交付金
●高田　貫太：大韓民国／08.3.7～3.9／日韓共同研究の一環として、国立加耶文化財研究所における咸安城山山城出土木簡の見学ならびに研究交流をおこなうため／運営費交付金
●竹本　晃：大韓民国／08.3.7～3.9／日韓共同研究の一環として、国立加耶文化財研究所における咸安城山山城出土木簡の見学ならびに研究交流をおこなうため／運営費交付金
●馬場　基：大韓民国／08.3.7～3.9／日韓共同研究の一環として、国立加耶文化財研究所における咸安城山山城出土木簡の見学ならびに研究交流をおこなうため／運営費交付金
●浅野　啓介：大韓民国／08.3.7～3.9／日韓共同研究の一環として、国立加耶文化財研究所における咸安城山山城出土木簡の見学ならびに研究交流をおこなうため／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／08.3.7～3.12／飛鳥資料館企画展示出陳交渉／運営費交付金
●森本　晋：タジキスタン共和国、ウズベキスタン共和国／08.3.8～3.17／アジナタバ関連資料調査、文化遺産専門家会議「日本と中央アジア」出席と関連資料の調査／運営費交付金
●田辺　征夫：中華人民共和国／08.3.8～3.12／朝陽地区隋唐墓の整理と研究／運営費交付金
●小林　謙一：中華人民共和国／08.3.8～3.15／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●加藤　真二：中華人民共和国／08.3.8～3.15／朝陽地区隋唐墓の整理と研究／運営費交付金
●児島　大輔：中華人民共和国／08.3.10～3.22／中国四川省における唐代仏教摩崖造像の写真撮影および関連資料収集／他機関負担
●降幡　順子：中華人民共和国／08.3.12～3.15／朝陽地区隋唐墓の整理と研究／運営費交付金
●脇谷　草一郎：中華人民共和国／08.3.12～3.15／朝陽地区隋唐墓の整理と研究／運営費交付金
●牛嶋　茂：中華人民共和国／08.3.12～3.19／朝陽地区隋唐墓の整理と研究／運営費交付金
●中川　あや：中華人民共和国／08.3.12～3.19／朝陽地区隋唐墓の整理と研究／運営費交付金
●和田　一之輔：中華人民共和国／08.3.12～3.19／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●金田　明大：中華人民共和国／08.3.12～3.19／日中古代墳墓副葬品の比較研究／科研費
●島田　敏男：ベトナム社会主義共和国／08.3.13～3.17／ベトナム国ハタイ省ドゥオンラム村におけるワークショップ参加／運営費交付金
●黒坂　貴裕：ベトナム社会主義共和国／08.3.13～3.17／ベトナム国ハタイ省ドゥオンラム村におけるワークショップ参加／運営費交付金
●巽　淳一郎：大韓民国／08.3.19～3.23／2008年度以降の共同研究の計画、具体的な研究課題の選定、研究員の派遣日程などについての協議をおこなうため／運営費交付金
●次山　淳：大韓民国／08.3.19～3.23／2008年度以降の共同研究の計画、具体的な研究課題の選定、研究員の派遣日程などについての協議をおこなうため／運営費交付金
●小田　裕樹：大韓民国／08.3.19～3.23／2008年度以降の共同研究の計画、具体的な研究課題の選定、研究員の派遣日程などについての協議をおこなうため／運営費交付金
●高田　貫太：大韓民国／08.3.19～3.23／2008年度以降の共同研究の計画、具体的な研究課題の選定、研究員の派遣日程などについての協議をおこなうため／運営費交付金
●馬場　基：大韓民国／08.3.19～3.23／2008年

度以降の共同研究の計画、具体的な研究課題の選定、研究員の派遣日程などについての協議をおこなうため／運営費交付金

●松井　章：アメリカ合衆国、カナダ／08.3.20～3.30／カルフォルニア大学バークレー校のシンポジウムで発表、ワシントン州オリンピア市ピュージェット・サウンドコミュニティー・カレッジでデール・クロース教授とサンケン・ビレッジ遺跡の共同研究の打ち合わせ、バンクーバー市で開催されるアメリカ考古学会で研究発表／先方負担（内、23～30の滞在費は科研費）

●小澤　毅：中華人民共和国／08.3.25～3.28／中国の造瓦技法の変遷に関する国際シンポジウム／科研費

●山崎　信二：中華人民共和国／08.3.25～3.28／日中都城の比較研究／運営費交付金

公開講演会

第100回　公開講演会

2007年6月16日

◆大河内 隆之：年輪年代学とデジタル画像技術

年輪年代学において、デジタル画像技術は重要な役割を果たしている。高解像度のデジタルカメラによる鮮明な年輪画像をコンピュータで画像計測する方法は、年輪データを効率よく取得するのに効果的であり、近年ではこのような年輪年代調査方法が広がりつつある。また、マイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置を導入することで、表面の劣化や彩色などの影響で対象表面では年輪の観察ができないような場合でも、非破壊で年輪年代調査が可能になった。このような現状とこれを支えているデジタル画像技術の概要について、事例を交えながら紹介した。

西大寺食堂院の事例では、デジタル画像による年輪年代測定によって、767年に伐採されたヒノキ材が井戸枠に用いられていることが明らかになった。また、マイクロフォーカスＸ線ＣＴを用いて木彫神像を非破壊年輪年代測定した事例についても紹介した。

◆林　正憲：「西大寺伽藍に迫る－最新の発掘調査成果から－」

本講演では、これまで注目されることの少なかった西大寺の伽藍配置について、最新の発掘調査成果を交えながら、新たに明らかとなった知見とそこから導き出される見解について述べた。伽藍の中で最も初期につくられた四王堂では、創建当初の状況を明らかにするとともに、平安時代における再建の状況も知ることができた。伽藍の中心建物の一つである薬師金堂では、巨大な凝灰岩を柱穴に据えるという特殊な工法を確認するとともに、柱穴の配置から建物構造を復元することが可能となった。伽藍東北域にある食堂院では、広範囲にわたる発掘調査の結果、多くの建物の存在とその整然たる配列構造を明らかにすることができ、井戸から見つかった多量の木簡から食堂院の機能について多数の知見を得ることができた。そして、これらの知見を総合して、西大寺の全体の伽藍配置が極めて計画的に整備されたことを説明した。

第101回公開講演会

2007年10月20日

◆降幡 順子：キトラ古墳壁画の保存

キトラ古墳（７世紀末－８世紀初頭）で確認された四神、十二支像、天文図の壁画は、壁画を取り外した上で充分な修理をおこない保存する方針となった。取り外した壁画については、保存修理を進め、白虎と玄武については2006年春および2007年春に一般公開をおこなっている。これらの壁画について、実際の取り外し作業や保存修理作業の様子を紹介し、さらに作業をおこなう上で必要な漆喰の現状を知るための科学的な調査を実施しているので、その結果について紹介した。

壁画の取り外し作業は、壁画表面の保護（表打ち）、取り外し、壁画裏面の保護（裏打ち）、表打ちの除去という行程でおこなわれている。取り外した壁画は、緩やかに乾燥を進め、事前調査のあと、保存処置（強化処置）をおこなっている。この処置は、裏面からメチルセルロース水溶液、低濃度のアクリル樹脂（Ｂ－72）を塗布し、最後にアクリル樹脂とアリレート繊維のフィルムを酢酸エチル溶液にて貼り付けて全体を強化する作業である。現在は、展示・保管をするために、裏面にはさらに緩衝材を設置し、展示用仮パネルにセットしている。

キトラ古墳の漆喰は、発掘中に出土した資料を用いて定量分析および薄片資料の観察を実施した。分析の結果、高松塚古墳の漆喰とよく似た組成を示し、ほぼ同質であると考えられる。しかし、酸化鉛の含有量については、キトラ古墳の漆喰には極微量しか含まれず、高松塚古墳の漆喰とはまったく異なる結果が得られた。薄片資料を偏光顕微鏡下で観察した結果、断面方向の観察では、ほぼすべては方解石の微晶集合体で、0.05㎜大におよぶ石英や斜長石がごく僅かに観察された。漆喰表層付近には空隙があり、それが内部にまで虫食い状に連続しているところも多く、漆喰自身の脆弱化は顕著に現れていた。しかし、高松塚古墳の漆喰で指摘されているような、表層付近における二次的な結晶成長の痕跡は今回の試料片では見られず、また明らかに亀裂と判断できる部分は、直線的で二次的に大きな結晶が成長し充填しているところもあった。

壁画上では線状の窪みと赤色顔料を確認している。下書きの方法としては念紙を用いて尖筆などでなぞったことが考えられ、下書きの方法を考える上で有用な情報を壁画面から得ることができる。

また白虎部分の赤色顔料については、水銀朱（HgS）、窪みの赤色部分からは鉄を顕著に検出することから弁柄（Fe_2O_3）の可能性が高いと考えられることなど、壁画の保存修理の一端を、写真や動画を用いて紹介することができた。

◆平澤 毅：文化遺産としての風景の保存

歴史的庭園や自然の峡谷、海浜、山岳をはじめ、棚田や里山、伝統的な集落や町並みなど、日本には愛すべき様々な風景が存在する。これらは現在、文化財保護法において、名勝地、文化的景観、伝統的建造物群など、貴重な文化財の類型として広く認知されている。こうした風景は、可視的なモノとして理解される側面を有するが、実際のところそれを感じる人々の文化の枠組みや生活の営み無くして存在しないものである。また、種々の様態を示す風景には、朝夕・昼夜、季節によって、あるいは年を経る中で常に変化を続ける性質もある。

こうしたことを踏まえ、講演においては、「風景／景観」、「遺産と風景」、「遺産保存の歴史と風景」、「『文化的景観』ということ」などの切り口から、国内外の様々な事例や考え方を示しつつ、「文化遺産としての風景」の捉え方とその保存の観点、あるいはそれらの取組がどのように発展してきたかなどについて解説した。

研究集会

◆古代官衙・集落研究会

2007年12月14～15日

「古代地方行政単位の成立と在地社会」をテーマに開催した。研究報告は、清野陽一「常陸国の古墳分布と郡領域」、大橋泰夫「国郡制の成立と官衙」、田尾誠敏「令制国の成立と土器流通」、木本雅康「筑後国御原郡の郡界と筑後・肥前国境」、門井直哉「歴史地理学から見た郡域編成の成立」、市大樹「木簡から見た国評制の成立」、荒井秀樹「文献史学から見た国郡制の成立」の７本である。考古学・文献史学・歴史地理学の諸分野から、日本古代律令国家の国・郡という行政単位に基づく地方支配がいつ、どのような形で成立してきたか、その行政単位はどのような性格を持っていたのか、また、その行政領域は在地社会の生活圏といかなる関係にあったのかなどについて、研究の現状や論点を報告して総合討議をおこない、課題の共有化を図った。参加者は地方公共団体・大学関係者等158名で、アンケートでは97%が有意義であったと回答が得られた。この研究会の報告論文集は2008年度に刊行する予定である。

（山中 敏史）

◆遺跡整備・活用研究集会（第2回）

2008年1月25日～26日

本研究集会は2006年度から年１回継続的に開催しているもので、第１回は「遺跡の教育面に関する活用」をテーマとして2007年１月25・26日に開催し、教育面からみた遺跡の活用に関する実績と課題について様々な角度から検討をおこなった。

第２回となる本年度は、遺跡保護の体制の在り方について検討することとし、特に地方自治法の改正により2003年に「公の施設」の管理に導入された指定管理者制度との関わりを具体的な論点に据え、テーマを「遺跡の保存管理・公開活用と指定管理者制度」として開催した。

基調講演においては《指定管理者制度と文化財・遺跡・公園》を主題とし、２本の講演を通じて、指定管理者制度を巡る基礎的事項のほか、公園や遺跡を管理する上での制度の捉え方などが示された。事例報告では、《指定管理者に採用された立場からの創意工夫》、《文化財保護行政と指定管理者制度の接点》の２つの観点から、各３本の報告を通じて、取組の実際と課題が示された。総合討論では、指定管理者の業務、制度運用における組織、住民との連携、専門・技術の継続性、管理業務の評価などについて議論され、今後における遺跡の保存管理・公開活用の在り方そのものを検討していく上でも重要な観点が示された。

（平澤 毅）

◆第11回古代瓦研究会
飛鳥白鳳の瓦づくり－藤原宮式軒瓦の展開－

2008年2月2日～3日

1998年以来、飛鳥白鳳期の古代瓦を、実物を見ながら議論し、造瓦技術の変遷と伝播について検討する研究集会をおこなってきた。第11回目となる今回は、藤原宮式や本薬師寺式軒瓦の展開をテーマとして開催した。近年の発掘調査により蓄積しつつある藤原宮跡出土瓦、各生産地、同笵瓦が分布する地域の様相、また、藤原宮式軒瓦と意匠を一部共有し、製作時期が重複する本薬師寺創建軒瓦、各地における本薬師寺式軒瓦の様相、藤原宮式軒瓦との時間的前後関係が注目される九州の老司式軒瓦についての報告がなされた。

報告を踏まえた討議では、①藤原宮式軒瓦の属性（本薬師寺式軒瓦の位置づけ）の検討、②藤原宮式軒瓦の生産・供給体制の再整理、③藤原宮式軒瓦・本薬師寺式軒瓦の在地における展開、などの論点を中心に議論をおこなった。資料の蓄積や新出資料により新たな知見が得られるとともに、丸瓦・平瓦も含めた総合的な検討の必要性も今後の課題として浮き彫りになった。参加人数205名であった。

（中川 あや）

◆「遺跡出土の建築部材に関する総合的研究」シンポジウム　－出土建築部材の調査方法と視点－

2008年2月15～16日

2006年度からおこなっている、「遺跡出土の建築部材に関する総合的研究」の一環としておこなったもので、今年度は表記のテーマを設定し、宮本長二郎先生による「出土建築部材研究の展望」と題する基調講演の後、３つのセッションを設定した。セッション１「情報の収集と公開」では、西田紀子「全国遺跡出土建築部材データベースの構築をめざして」、山桝雅美「青谷上寺地出土の建築部材―データベースの整備をめざして―」、セッション２「出土建築部材の調査方法」では、黒坂貴裕「出土建築部材における実測方法の課題と現状」、中川律子「出土部材の調査方法　―現状と課題―」、セッション３「出土部材の調査と視点」では、榎本剛治「胡桃館埋没家屋の部材とその調査」、加治屋嘉文「熊本県麦島城跡の出土部材とその調査」の各発表の後、関連する研究者のコメントとともに討議をおこなった。

討議の結果、基礎的なデータベースの作成と同時に、調査現場に資するような類例索引的な事例集の作成が急務であることが明確となった。調査方法については、考古学・建築学それぞれの視点から意見が出され、今後、調査マニュアル的なものの作成を目指すこととなった。なお、今回のシンポジウムの参加者は約70名、その内容は、2008年度に冊子に纏める予定である。

（島田 敏男）

◆保存科学研究集会

2008年2月27～28日

今年度の研究集会は、「壁画古墳の保存に関わる諸問題」と題しておこなった。近年、高松塚古墳壁画およびキトラ古墳壁画保存の問題が大きくクローズアップされており、特に今回は、国宝壁画を守るために高松塚古墳の石室解体というこれまでに類をみない作業もおこなわれた。古墳壁画の保存には環境をはじめとした様々な問題が存在するが、研究集会では、壁画を有する古墳の保存問題に焦点をしぼり、高松塚古墳壁画の保存修理のための石室解体に関する報告とあわせ、壁画装飾されたいくつかの装飾古墳の保存の現状についての報告をおこない、これまでの取り組み、これからの対策などについて、情報の交換と討論をおこなうことを目的とした。

研究集会は５部構成とし、それぞれ「第Ⅰ部　高松塚古墳石室解体にともなう墳丘の発掘調査」、「第Ⅱ部　石室解体に用いた機材の展示公開」、「第Ⅲ部　高松塚古墳石室壁画の保存修理のための石室解体」、「第Ⅳ部　各地域における装飾古墳の現状」、「第Ⅴ部　質疑応答・討論」をおこなった。高松塚古墳の石室解体に至った経緯、石室解体の技術的な報告がおこなわれるとともに、実際に石室解体で用いられた治具や搬送車輌の展示・公開、実大の石材のコロを用いた地切りの実演などもおこなわれた。また、熊本県、福岡県および茨城県の装飾

古墳の保存の現状と課題の報告をおこなった。総合討議を通して、壁画古墳の保存についての問題点を共有することができたことはきわめて有意義であった。

（肥塚 隆保）

◆講演会　宮中儀礼の復興と文化遺産の活用

2008年3月29日

平城宮第一次大極殿完成後の遺跡の活用プログラムを念頭に置いて、文化遺産部景観研究室・遺跡整備研究室が合同で開催したものである。昨年は関係者や関係機関を招いて研究会として実施したが、平城遷都1300年事業協会が催事として年中行事の再現なども計画しており、内容の具体化、市民への周知の必要性を感じ、公開でおこなった。

韓国ソウルの朝鮮時代の王宮、景福宮などで守門将の交替儀式や、大射礼、即位儀と朝会儀礼などをおこなっている、韓国文化財保護財団の安泰旭文化事業室長を招き、儀礼の再現の方法、事業を行う上での現状と課題などを報告してもらった。また、内田は、宮殿の造営も年中行事も本来的には天の思想と関わることなどを報告し、いくつかの年中行事を提案した。

（内田 和伸）

科学研究費等

◆カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究

代表者・杉山　洋　特別研究促進費　継続

カンボジアにおける中世遺跡、わけてもプノンペンとピニャールーの2カ所にあったとされる日本町を対象とし、カンボジアにおける中世遺跡との関連を明らかにするとともに、当該期の日本人町について、日本出土遺物と関連する遺物の出土を元に、その生産流通関係を考察する。一方で、カンボジアにおける中世期の調査研究のために、クメール陶器の窯跡を調査し、クメール陶器の編年研究を推進する。

日本人町の調査としては今年度はこれまでの調査によって出土した資料の整理を行った。12月にはソサイ窯跡群の第6時発掘調査を行った。今回の調査で窯体のほぼ全容を明らかにすることができた。

これらの成果を受けて3月には報告書を刊行した。

◆文化的資産としての名勝地の概念とその適用に関する基礎的研究

代表者・平澤 毅　特別研究促進費（基盤研究（C）相当）新規

本研究は、記念物の一類型である「名勝地」について、その概念の具体的資産への適用と保護の在り方を検討するための総括的資料の作成を含む基礎的な研究をおこなうものである。

今年度は、資料の収集・整理・検討を進めるとともに、基礎的情報の収集について関係機関等と協議をおこない、全国的な調査に係る準備作業をおこなった。また、関連する一部成果を学術雑誌に掲載した。

◆推論機能を有する木簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発

代表者・渡邉 晃宏　基盤研究（S）継続

5カ年計画の最終年度にあたる。昨年度ヴァージョンアップしてＷＥＢ公開した文字画像データベース「木簡字典」の地域的・時代的データの充実を図る一方、『平城宮木簡』所収木簡を対象とした印刷版の木簡字典『日本古代木簡字典』を刊行した（親字数940文字、延べ5000文字を掲載）。また、木簡の文字釈読支援システム「Mokkan shop」について、字書の入れ替えと、候補表示の文字コードから字形そのものへの変更など、使用意見に基づく改良をおこなった。

5カ年間の研究により、「木簡字典」と「Mokkan shop」の実用化という形でほぼ所期の目標通りの研究成果を上げることができた。いずれも奈文研のホームページ上に開設した木簡に関する総合情報サイト「木簡ひろば」において公開している（http://hiroba.nabunken.go.jp/）。

なお、出土文字資料、特に木簡のもつ情報のデータ化のあり方を考えるため、「木簡の情報解読・発信・保存・活用に関するワークショップ」を開催し（2008年1月8日）、また公開シンポジウム「木簡研究の最前線―地下の正倉院文書をよむ」を実施した（2007年11月23日）。

◆日中古代墳墓副葬品の比較研究

代表者・金田 明大　基盤研究（A）継続

遼西地域の唐墓から出土した俑は、施釉焼成式（陶俑）と加彩乾燥式（泥俑）に大別でき、前者には中原地域と同じ笵型から作られた可能性が高い陶俑が含まれる。また、一墳墓から出土した同笵の俑にあっても、製作技法の違いから、複数の技術者が関わって製作されていたことが明らかになった。

◆古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究

代表者・山崎 信二　基盤研究（A）継続

本研究は、日本・韓半島・中国の4世紀から8世紀までの瓦について、国ごとに文様や製作技術の変遷を把握し、国を越えた技術伝播の様相を解明することを目的としている。3年めにあたる本年度は、韓国の公州・扶餘・益山地域から出土した百済熊津・泗沘時代の瓦と、中国の隋唐時代の洛陽城・長安城出土瓦の調査を実施した。また、中国の研究者を日本に招聘して意見交換をおこなったほか、北京で中国の造瓦技法の変遷に関するシンポジウムを開催した。

◆遺跡出土の建築部材に関する総合的研究

代表者・島田 敏男　基盤研究（A）継続

今年度は4ヶ年計画の2年度目で、全国の出土建築部材のデータベースの作成を推進するとともに、飛鳥・藤原地区出土の出土建築部材および他遺跡出土の建築部材を調査し、調査を通して出土建築部材の調査手法の検討もおこなった。そして、研究会集会を開催し、全国の研究者と連携をはかるとともに、出土建築部材の調査研究手法について議論をおこなった。

◆東アジアにおける家畜の伝播とその展開に関する動物考古学的研究

代表者・松井 章　基盤研究（A）新規

前年度までの課題（基盤A）に続き、2007年度から「東アジアにおける家畜の伝播とその展開に関する動物考古学的研究」（基盤A）が4年間、採択された。本年度は中国浙江省田螺山遺跡、韓国金海会峴里貝塚の発掘資料の観察、整理をおこない、国内では、佐賀市東名遺跡（縄文早期）、大分市横尾遺跡（縄文早期・前期）、大分市大友氏館跡（中世）から出土した動物遺存体を分析した。

◆富本銭と和同開珎の系譜をめぐる比較研究

代表者・松村 恵司　基盤研究（B）継続

最終年度となる今年度は、西日本の和同開珎の出土集成をおこない、全国集成を完成させた。3月1・2日の両日、研究集会「和同開珎をめぐる史的検討（2）」を開催し、考古学、文献史学、冶金学、貨幣学の研究者と連携して、和同開珎の出土状況から流通実態の解明に迫る方法について議論をおこなった。また藤原宮から出土した新種の富本銭の材質分析、銭文の比較、字体の類例探しなどをおこない、富本銭の変遷

に関する見通しを得た。4カ年に及ぶ研究の総括として「富本銭と和同開珎の系譜をめぐる比較研究（下）」を刊行した。

◆霊廟建築における荘厳手法の総合的比較研究

代表者・窪寺 茂　基盤研究（B）継続

本研究は、全国各地の霊廟建築を対象とした構造・意匠・装飾技法面の調査研究から、霊廟建築の荘厳に関わる設計理論・手法を明らかにし、当時の建築文化の実像を究明することを目的とする。3年目にあたる本年度は、仙波東照宮（埼玉）、上野東照宮（東京）、徳川家霊台（和歌山）ほかの霊廟建築調査などを実施した。

各建築の実体を把握するにあたり、過去の保存修理により建築の様相（とくに塗装、金具）が建設当初から変化している点が、これまでの現地調査で問題となっている。現在この点に注意して現地調査結果を整理し、社殿形式等による建築構造、建築仕様などの設計内容や、荘厳手法の類似・相違点などの解析を、研究分担者間で討議しながら進めているところである。

◆「灰吹法」の実証的検証に基づくわが国における金・銀の製錬技術の技術史的研究

代表者・村上 隆　基盤研究（B）継続

わが国における約2500年の金属利用の歴史の中で、特に金・銀に注目し、その純度を高める精錬技術の技術移転と定着、さらには技術発展に関して実証的な検証をおこなうことが、本研究の目的である。わが国における鉱石の採鉱から金属の製・精錬に至る技術に対する従来の研究は主に文献史料調査に基づくため、文献史料自体の存在が希薄である古代の実状は詳らかでない。本研究は、最近の考古学的発掘によって新たに出土した実資料に対する科学的調査の成果に基づき、古代からの技術の変遷を実証的に検証する手法をとることを大きな特徴とする。金・銀の純度を上げる灰吹法の原形と呼べる方法が、7世紀後半にまで遡ることを、本研究における昨年度の成果として報告した。今年度は、さらに日本における鉛を用いた金・銀を精錬する技術には、①古代タイプと②近世タイプの二通りの系譜がある可能性を示唆することができた。これまで1533（天文2）年に日本で初めて導入されたとされてきた灰吹法の原形がすでに古代からおこなわれており、さらに灰吹法に用いる炉の形態にも歴史的変遷があることが実証されたことは、日本の科学技術史を書き換える重要な知見となると考えられる。

◆打音試験法及びアコースティックエミッション法による石造文化財の劣化診断技術の開発

代表者・高妻 洋成　基盤研究（B）継続

昨年度試作した打音試験装置にさらなる改良を加え、石材の浮き・剥離・強度に関する基礎的なデータ収集をおこなった。また、アコースティックエミッション法では石造文化財の移動・搬送におけるモニタリングシステムとしての実用化に取り組み、データを集積した。

◆南都における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究

代表者・吉川 聡　基盤研究（B）継続

本研究は、南都の古寺社が所蔵してきた歴史資料について、本来伝来した場所から流出した状態で現在保管されている資料群の性格を明らかにする。2年目の本年度は、引き続き新修東大寺文書聖教の中村準一寄贈文書の調査を続行し、江戸時代後期から明治維新期の日記や、絵図等を確認した。また、明治維新期の日記の一部を翻刻した。江戸時代から明治維新にかけての奈良・興福寺に関する貴重な史料といえる。

東大寺図書館での文書調査風景

◆大極殿院の思想と文化に関する研究

代表者・内田 和伸　基盤研究（B）継続

『文選』賦篇や『旧唐書』志第二の明堂の記載、『記紀』の国産み神話などを検討し、奈良時代の第一次大極殿院が宇宙の構造をなぞらえ、そこに設置された高御座は天の御柱を意図して設計されたことなどを発表した（奈良女子大ＣＯＥ講演会、『古代日本の構造と原理』青木書店）。また、復元整備の進む平城宮跡での活用のあり方として、いくつかの年中行事を提案した（宮中儀礼の復興と文化遺産の活用講演会、『埋蔵文化財ニュース』第130号）。

◆マイクロフォーカスＸ線ＣＴを用いた非破壊年輪年代法による木彫神像の研究

代表者・大河内 隆之　基盤研究（B）新規

本研究は、マイクロフォーカスＸ線ＣＴ装置を用いて調査対象の断層画像を撮影し、得られた画像をもとに非破壊で年輪年代測定する技術を木造神像彫刻の調査に応用するものである。本年度は、奈良国立博物館所蔵の神像、栗東歴史民俗博物館寄託の神像群などを奈良文化財研究所に輸送し、同法による非破壊年輪年代調査を実施した。また、本研究の先行調査として昨年度に実施した國學院大学神道資料館所蔵の木造僧形坐像（伝僧形八幡神像）の事例について、第24回文化財科学会大会などで発表した。

◆古代の宮殿および官衙の占地に関する復元的研究

代表者・小澤 毅　基盤研究（C）継続

本研究は、近年の考古学的調査の進展を承けて、7世紀以前の宮殿の所在を具体的に推定し、占地上の特徴の存否ならびに時代や地域による変化を把握することを目的としている。最終年度にあたる本年度は、文献史料との整合性や占地の面から、具体的な候補地についてそれぞれの妥当性を検証し、宮殿としての通有の特徴や時代・地域による変化をとりまとめた成果報告書を作成した。

◆古代冶金工房の基礎的構造に関する考古学的研究

代表者・小池 伸彦　基盤研究（C）継続

本年度は、7世紀以降の冶金工房の3類型（伝統的工房・大規模集約型工房・新技術による工房）と、古墳時代の冶金工房の類型との比較検討を進め、関連性や系譜を辿り、展開過程の跡付けを試みた。その中で新たに古墳時代の一類型として大県遺跡型を設定し飛鳥池遺跡との関連性を追究し、初期大規模官営工房の成立過程について考察した。また、文献資料を検索しデータ入力を実施した。

◆東アジアにおける武器・武具の比較研究

代表者・小林 謙一　基盤研究（C）継続

5世紀の日本列島に出現する騎兵装備、そのなかでも主要な防禦具である挂甲は、高句麗を含む中国東北地方を源流とするものであった。それは系譜的には、さらに遡り、前漢代に成立していた形式を異にする2種の鎧甲の要素を合わせ持っていることが明らかになった。

◆日韓出土土器による3・4世紀国際交流の研究

代表者・次山 淳　基盤研究（C）継続

本研究は、土器を主たる材料として、日本列島の弥生時代終末から古墳時代前期にあたる３・４世紀における日本列島と朝鮮半島との交流のありかたを検討するものである。今年度は、韓国における資料見学等をおこなうとともに、土器の分布からみた当該期の交流形態について「古墳時代初頭の瀬戸内海ルートをめぐる土器と交流」と題して考古学研究会第53回総会において報告し、内容を『考古学研究』第54巻第３号に発表した。

◆蓄積型自然放射線量とＸ線分析による古代ガラス・セラミックス材質の考古科学的研究

代表者・降幡 順子　基盤研究（C）新規

本研究は古代ガラス・セラミックスの材質調査から当時の流通・技術伝播や権力構造による分配の構造を明らかにしていくことを目的としている。アジア全体での産地の変遷と、日本国内での材質の変遷を併せて考察していくことにより、当時の産業・技術史的な流れを解明していく。

本年度は、材質の時代的な変遷や加工法を調査することにより出土遺物を分類していくことをおこなった。ガラス、陶磁器片のイメージングプレートを用いた構造調査（ＣＲ法）、蓄積型自然放射線量の測定（ＡＲ法）を取り入れて迅速かつ多量の遺物の分析をおこない、さらに標準試料を用いた蓄積型自然放射線量の数値化のための基礎的実験をおこなった。

◆律令国家の国郡制成立過程に関する考古学的研究

代表者・山中 敏史　基盤研究（C）新規

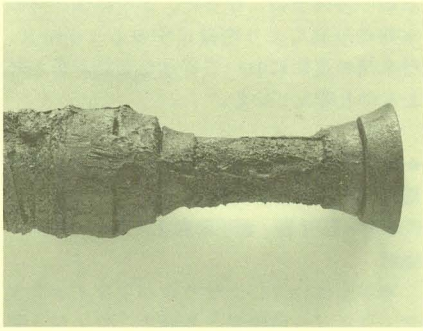
今年度は、前期評段階の官衙遺跡やミヤケ関係遺跡の発掘調査資料を収集し、掘立柱建物の平面規模・構造・変遷等についてデータベース化を進め、後期評衙や郡衙の建物規模・構造等の比較検討を始め、前期評と後期評段階との間における画期の存在を再確認した。また、国衙遺跡の初現期の政庁遺構は郡庁構造と大差ない構造であり、国衙としての格式を整えた国庁成立時期は８世紀に下ることが判明した。また、筑後国御原・御井郡の官衙関係遺跡や、三野国ム下評大山五十戸・刀支評恵奈五十戸の比定地などの現地踏査をおこない、評成立における歴史地理的環境について検討した。そして、これらの地域にはミヤケやアガタといった大和王権の王領の地が存在していた可能性があり、それが一早い立評や五十戸編成と結びついていることを推察した。また、郡界線を挟んで隣接する郷比定地や、近江国覇流村墾田地図にみえる郡界線と現地との関係について検討し、郡界線が自然地理的環境や在地の生活圏とは無関係に設定されている状況を明らかにした。

◆弥生・古墳時代における日韓墳墓出土鉄製武器の比較研究

代表者・豊島 直博　若手研究（B）継続

近年資料が増加している馬韓地域の武器を調べるため、国立全州博物館で調査をおこなった。また、日本の前期古墳から出土する鉄剣とヤリについて論文を執筆し、研究成果報告書『古墳時代前期の鉄製刀剣』をまとめた。

古墳時代の開始期には、畿内を核とする鉄製武器の再分配が始まる。武器の授受が支配者層の連携に重要な役割を果たしたと結論づけた。今後は中国大陸の武器と比較研究を進めたい。



熊本県天水経塚古墳出土鉄剣の把

◆古代東アジアにおける木造塔の構造と意匠に関する研究

代表者・箱崎 和久　若手研究（B）継続

中国河北省に残る、定州開元寺塔をはじめとして木造の意匠をもつ10塔あまりの調査をおこなった。いずれも磚造で、木造の意匠をもつものもあるが、横架材の筋が通らないなど木造の構造では合理的でない部分がある。これまでの研究を通じて、八角平面の塔の構造的特質や、方形平面の塔との差異があるのかどうかなどが今後の分析課題となった。

◆古代中世の建築用語とその規格－造営史料と建築部材の検討を通して－

代表者・西田 紀子　若手研究（B）継続

昨年度にひきつづき、東寺百合文書・教王護国寺文書所収の造営関連史料から建築用語を収集した。今年度は、東寺百合文書イ函からキ函について、目録および写真帳をもとに造営関係史料を集め、建築用語をデータベースソフトに入力した。

３ヵ年の研究により東寺以外の社寺関連史料からも、同様の建築用語の事例が蓄積されつつある。こうした成果により、今後の中世建築用語研究を深化させる道筋をつけられた。

◆飛鳥藤原出土木簡の資料的検討と官司運営の復元

代表者・市 大樹　若手研究（B）継続

前年度に引き続き、飛鳥・藤原地域から出土した木簡の資料的検討を進めた。その成果の一端は、『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報21』、『奈良文化財研究所紀要2008』、『木簡研究29』に報告した。また、藤原京跡出土木簡などを使った衛門府の官司運営の実態は「門膀制の運用と木簡」「大宝令施行直後の衛門府木簡群」「右大殿付札考」と題する論文にまとめた。このほか、木簡の比較検討という観点から、「慶州月城垓字出土の四面墨書木簡」「平城宮・京跡出土の召喚木簡」と題する論文を執筆し、木簡が出土した遺跡である藤原京跡について、同題の一文をとりまとめた。

◆古代東アジアにおける火葬習俗の伝播に関する基礎的研究

代表者・小田 裕樹　若手研究（B）継続

本研究は日本古代の「火葬」の歴史的意義を明らかにするために、東アジアにおける火葬の位置づけとその伝播過程の解明を目的としている。研究２年目の今年度は、韓半島を対象として、昨年度集成した報告書データをもとに、資料調査・遺跡踏査をおこない、韓国の研究者と意見交換をおこなった。また、従来の研究成果を論文にまとめた。

◆東アジアにおける文化遺産のオーセンティシティに関する比較研究

代表者・清水 重敦　若手研究（B）継続

今年度は対象を韓国に絞り込み、20世紀前半における日韓の建造物保存修復を、修理方針、技術者、修理技術から比較した。東アジア各国における建造物のオーセンティシティに関する微細ながら本質的な差異として、建造物の屋根構造が規定する修復方法が、オーセンティシティ概念を拘束する面があることを指摘した。

◆倉の立地から見た集落構造とその景観文化：群倉型集落を事例として

代表者・黒坂 貴裕　若手研究（B）継続

住居が立地する集落とは別のところに倉を密集させて建てる習俗は、一般に火災の類焼を防ぐためとされている。しかし、調査からは当該集落の農地は狭小で、焼畑を

含む畑作を農業の中心としていた場合が多いことが把握できる。耕作形態と集落構造の関係について、各集落の耕作地・住居・倉の立地状況を中心に、引き続き分析をおこなう予定である。

◆古代都城儀式の歴史的変遷にかんする研究

代表者・山本 崇　若手研究（B）新規

本申請研究は、古代都城の中枢に位置する大極殿とそこで行われる儀式の変遷を、成立から終焉段階までを対象として再検討せんとするもので、『大内裏図考証』（1788年）の全面的改訂による史料集の完備とそれを踏まえた都城の活用方法の検討を課題としている。今年度は、既刊史料集（稿）を補訂する史料収集を続けるとともに、申請者が執筆を担当する大極殿関係刊行物の準備を進めた。

◆定住民と遊牧民における埋葬体系の比較研究－ヨルダン南部を例として－

代表者・橋本 裕子　若手研究（B）新規

本研究は初期遊牧民人骨における形態学的な特徴を明らかにし、同時期の定住民との形態学的な異動と埋葬体系を明らかにするものである。本年度はヨルダンでの発掘調査と初期遊牧民人骨の研究を中心に行った。眺望のよい場所に位置するケルン墓群出土人骨は、二次葬で上肢の筋肉が発達し、遊牧に特化した生活状況が指摘できた。一方、砂漠地の平らな場所に位置するケルン墓出土人骨は、一次葬で上肢の筋肉が発達し、遊牧生活を基本とし、季節的に農耕なども取り入れていた生活状況が指摘できた。

◆銅鏡にみる古代東アジアの文化交流

代表者・中川 あや　若手研究（B）新規

本研究は、古代東アジア（9～12世紀前後）において盛んに製作され、各国間で影響を与え合った銅鏡に焦点を当て、その背景にある各国間の文化受容の一側面を解明することを目的とする。本年は、日本と韓国の出土鏡、平安時代の文献史料にみえる鏡関連記事の収集とデータ化をおこなった。また、成果の一部については大韓民国国立慶州文化財研究所において口頭発表をおこなった。

◆縄文時代における、縄文原体からみた社会構造変化

代表者・石田 由紀子　若手研究（B）新規

本研究は、縄文土器にほぼ普遍的に存在する施文具である縄文原体の動向から当時の社会構造変化を探るものである。研究初年度の今年度は、本研究の根幹となすと思われる西日本の縄文時代中期末から後期前葉の土器編年の再整理を行った。また、報告書をもとにして、主に中国、山陰、九州地方の資料収集を行い、縄文原体の撚り方向および撚り方のデータの蓄積をおこなった。

◆石造文化財と水に関する研究－溶出実験から捉えた化学的風化－

代表者・脇谷 草一郎　若手研究（スタートアップ）継続

昨年度の研究成果により屋外に位置する石造文化財の保存処理法として撥水処理が非常に重要であることが示唆された。そこで本年度はこれまで個別に評価されてきた既存の撥水剤を比較検討すると共に、別府大学の山路氏によって新たに開発された撥水剤の評価をおこなった。その結果、各撥水剤の差異をより明確にすることができ、撥水剤の選択において有効な知見が得られたものと考えている。

◆島嶼環境におけるラピタ人の拡散・適応戦略を探る考古学的研究

代表者・石村 智　若手研究（スタートアップ）継続

本年度は12月に、サウスパシフィック大学・フィジー博物館と共同で、フィジー諸島共和国でボウレワ遺跡を発掘調査し、杭上住居と考えられる遺構を検出するなど、ラピタ人の集落の実態解明へ向けての成果をあげることができた。また8月にはスウェーデンで開催された国際学会「VII International Conference on Easter Island and the Pacific」で発表をおこない、これまでの成果を公表した。

◆加飾壺の成立・展開からみた古墳祭祀の創出過程

代表者・廣瀬 覚　若手研究（スタートアップ）新規

本研究は、古墳出現期に盛行する加飾壺の成立・展開過程を明らかにし、古墳祭祀創出をめぐる地域関係を解明することを目的とする。本年度は、西日本各地の関連資料の集成を進め、岡山西部から広島・愛媛といった地域に、特徴的な口縁部形態を有する加飾壺が分布する状況を確認した。実見の結果、これらの壺は製作・施文技法においても高い共通性を有することがわかり、加飾壺の地域的展開・伝播経路を捉える上で重要な事例となることが判明した。

◆東大寺の成立過程の研究

代表者・児島 大輔　特別研究員奨励費　新規

本研究は、現存する仏像群および文献史料を主とする資料から東大寺の成立過程を明らかにすることを目的としている。

本年度は、年輪年代法の基礎となる現生ヒノキ資料の年輪計測をおこない、本調査に備えるとともに、「正倉院文書」、『続日本紀』、『東大寺要録』および関連諸経典類を精査した。また、中国・龍門石窟における盧舎那仏像造像との比較検討もおこなった。

◆動物考古学　Fundamentals of Zooarchaeology in Japan

代表者・松井 章　研究成果公開促進

これまで奈文研で作成した現生動物の骨格標本の中から主要種を選び、実測図によって遺跡出土の動物骨が同定できるよう意図した。本書のもとは埋文ニュース連載の『環境考古学』No.1～7で、第一次中期計画の成果が結実した。

◆目録学の構築と古典学の再生－天皇家公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明－

代表者・東京大学史料編纂所教授　田島 公（渡邉 晃宏）学術創成研究費　新規

禁裏・公家文庫収蔵史料のデジタル画像の集積と目録化をおこない、日本独自の目録学の構築を図る学際的研究である。都城発掘調査部史料研究室の渡邉晃宏が研究分担者として参加し、研究補助ツールの充実を図るため、主として木簡など出土文字資料による『日本古代人名辞典』の増補・訂正と、データベース化などを担当している。

今年度の成果は、a木簡データベースから人名データベースを作成するための基本ツールの開発、b平城宮・京出土木簡の年代を特定するための基本資料の整備の2点で、特別研究員古藤真平を採用してこれにあたった。

◆太平洋島嶼国における考古学教育とパブリック・アーケオロジー

代表者・石村 智　㈶福武学術文化振興財団歴史学・地理学助成　新規

本研究では、太平洋島嶼国における考古学教育の発展に向けて、特に一般の住人との関わりを重視した草の根レベルの考古学教育の実践を目指した。そこで、サモア独立国の離島マノノ島にて、一般住人の参加による考古学ワークショップを開催するプロジェクトを実施した。そこでは現地語によってセミナーを開き、現地語で書かれた

考古学関連書籍を計400部配布し、さらに小学校に中古のラップトップ・コンピュータを10台寄贈した。本プロジェクトは、草の根レベルの考古学教育のテストケースとして一定の成果をあげた。

サモア・マノノ島の小学生たち

◆春秋戦国時代における青銅器生産遺跡の研究－侯馬鋳造遺跡を中心として－

代表者・丹羽 崇史　㈶高梨学術奨励基金　新規

本研究は、中国春秋戦国時代における青銅器生産遺跡出土の笵（鋳型）・模など鋳造関連遺物、ならびに青銅器の製品を対象として、青銅器の製作技術、および生産活動の実態を明らかにすることを目的とした。8月に中華人民共和国に渡航し、山西省考古研究所、同侯馬工作站、山西博物院、長治博物館などで資料調査をおこなった。また、東京国立博物館、泉屋博古館所蔵の関連遺物の調査もおこなった。

学会・研究会等の活動

◆埋蔵文化財写真技術研究会

2007年7月7～8日に第19回総会および研究会をおこなった。

7月7日：総会　参加者96名（含委任状）・講演　参加者75名「文化財行政と文化財写真」（坂井秀弥氏；文化庁記念物課）

7月8日：参加者83名・発表　「年輪年代学におけるデジタル画像技術の活用」（大河内隆之氏；奈良文化財研究所）

発表　「ＣＴＰ工程の最新技術と校正方法」（宮内康弘氏；岡村印刷工業）

発表　「ネガフィルム入稿による白黒写真印刷」（中村一郎；奈良文化財研究所）

報告　「富山県の埋文写真事情」（とやま埋文写真研究会）

一日目は総会をはじめ、基調講演として文化財行政を主導する立場の文化庁記念物課の坂井氏に、文化財行政の中で埋蔵文化財写真を取り巻く状況や、全国的にどのような写真が求められているかの現状を講演いただいた。2日目はデジタル画像技術の活用事例として年輪年代学での画像による調査を大河内氏が発表。また、新しい印刷技術に対応するための基礎知識と応用を宮内氏と中村で発表をおこなった。今回の「文化財写真私の場合」少し趣向を変えて地方の文化財写真の現状を報告する形で富山県の文化財調査担当者有志が結成した「とやま埋文写真研究会」のメンバーによる富山県での文化財写真事情を報告した。

（中村 一郎）

◆東アジア文化遺産保存学会

2007年11月1～2日、ソウルにおいて開催された「東アジア文化遺産保存シンポジウム」において、「東アジア文化遺産保存学会」（国際学会）が設立された。本学会は、東アジアにおける文化遺産の保存に関する学術的研究の発展をはかり、併せて東アジア独自の文化遺産保存技術の開発研究とその普及・啓発を目的とするものである。

日本、中国および韓国の文化遺産の保存に携わる専門家によるシンポジウムが2001年北京、2006年宮崎にて開催されてきた。2006年の宮崎では、東アジアにおける文化遺産保存のための国際学会設立を目指し、各国において準備委員会を発足させ、2007年ソウルにて設立を期すことが採択されていたものである。

本学会の設立により、東アジアにおける文化遺産の保存について、その考え方に関する相互理解、共通の課題に関する共同研究などが大きく進展していくものと期待する。

（肥塚 隆保）

◆日本遺跡学会

「遺跡コンソーシアム－地域連携」をテーマとする日本遺跡学会2007年度大会が、2007年11月23～25日に九州国立博物館を中心に開催された。九州国立博物館との共催で、九州各県および9市町の各教育委員会など関係各機関の後援を得た。基調講演は西山徳明氏（九州大学大学院芸術工学研究院教授）「文化遺産マネジメントとツーリズム～アジア・太平洋と太宰府・萩の現場から」、平塚勇司氏（国土交通省九州地方整備局建設専門官）「九州の歴史的な連携の輪づくり戦略会議について」、毛利和雄氏（ＮＨＫ解説員）「歴史遺産の活用と地域振興」であった。シンポジウムでは大会テーマに関わる6本の事例報告と総合討議がおこなわれた。

（内田 和伸）

◆木簡学会研究集会

2007年12月1・2日、第29回木簡学会総会・研究集会を平城宮跡資料館講堂において開催した（参加者166名）。1日は総会のあと、栄原永遠男氏（大阪市立大学）「歌木簡の実態とその機能」、馬場基「荷札と荷物の語るもの」の2本の研究報告があった。栄原報告は、歌を書くために専用に作られた木簡の存在を各地出土の木簡から考証する。馬場報告は、荷札木簡の機能をその使用方法に則して総合的に考察する。ともにものとしての木簡という視点からの斬新な研究であった。2日は山本崇「2007年全国出土の木簡」で全国の木簡出土状況を概観した後、滋賀県塩津港遺跡出土の起請札木簡について濱修（㈶滋賀県文化財保護協会）・大橋信弥（安土城考古博物館）両氏、また新潟県延命寺遺跡出土木簡について田中一穂氏（㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団）の報告があった。

今回の研究集会では、2007年1月の韓国木簡学会の創設を受け、同会の朱甫暾会長（慶北大）と尹善泰総務理事（東国大師範大）の招聘が実現し、朱会長には「韓国木簡学会の出帆と展望」と題するご挨拶をいただいた。今後も積極的に学術交流を進めていきたいと考えている。なお、『木簡研究』第29号を刊行した。

（渡邉 晃宏）

◆条里制・古代都市研究会

2008年3月1日・2日の両日、第24回条里制・古代都市研究会大会が奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂で開催された。1日は、「三関と古代交通の再検討」をテーマに、森川幸雄「鈴鹿関跡をめぐる諸問題」、八賀晋「不破関跡をめぐる諸問題」、川村俊彦「愛発関跡をめぐる諸問題」、舘野和己「古代の関と三関」の4本の研究報告と質疑討論がおこなわれた。鈴鹿関跡の発見と調査成果をふまえて、古代の三関の意義や立地・構造を再検討しようとするものだが、愛発関の位置が未確定であることに示されるように、なお今後の研究が必要な部分も大きい。2日は、平城京の十条大路を確認した「大和郡山市下三橋遺跡（第2次調査）」や『続日本紀』の「田原道」とみられる道路を検出した「大津市関津遺跡の調査」をはじめ、「かつらぎ町西飯降Ⅱ遺跡の調査」「小浜市西縄手下遺跡の調査」「太田市天良七堂遺跡（新田郡庁）の調査」の5本の調査レポートがあり、それぞれ活発な質疑討論がおこなわれた。

（小澤 毅）

文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への指導・助言・協力等

●平城宮跡の整備

第一次大極殿復原事業について、文化庁および文部科学省大臣官房文教施設企画部参事官付平城宮跡整備事務所に対し、施工・監理業務に関する指導・助言をおこなった。

2007年度は主として、瓦・鴟尾・金具類の製作に対して協力をおこなうとともに、扁額検討会を開催して、扁額の設計協力をおこなった。また、2007年11月２日～11月４日に開催された、第一次大極殿復原工事現場見学会に協力した。

なお、大極殿は2008年３月現在、上層・下層の屋根葺中。2008年度からは、壁や扉の造作工事を開始し、2010年春の完成を目指している。

初重内部空間　基壇上より（2007年11月7日撮影）南西から

●高松塚古墳石室の発掘・解体事業

高松塚古墳の石室を解体して古墳から取り出し、壁画を保存修理するための国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業。文化庁の委託を受け、2006年10月より発掘調査を実施し、2007年４月５日から解体作業に着手した。解体作業は北端の天井石４の取り上げに始まり、北壁石→天井石３→西壁石３→東壁石３→天井石２→天井石１→東壁石２→西壁石２→南壁石→東壁石１→西壁石１→床石４→床石３→床石１→床石２の順に取り上げ、８月21日に無事に解体作業を終えた。その後、床石下の版築および地山開削状況を調査し、９月６日に発掘調査を終了して埋め戻し作業に入った。

本事業は、発掘調査班、石室解体班、壁画養生・修復班、環境・生物調査班、整備班というプロジェクトチームを東京文化財研究所と一体となって編成し、相互に連携、協力しながら事業を遂行した。作業は、石室の露出に備えて摂氏10度、湿度90％に環境制御された断熱覆屋内でおこなった。

解体作業は、発掘調査で石材の正確な寸法や、亀裂などの損傷が判明する度に、治具の改良や梱包フレームの製作、取り上げ方法の再検討をおこなうなど、予期せぬ事態に臨機応変に対応しながら準備を進めたが、特に治具の設計と製造は、タダノ技術研究所の全面的な協力のもとにおこなわれ、石室解体実施作業は飛鳥建設株式会社が中心となって実施した。取り出した石材は特殊搬送車両に積載し、500m離れた仮設修理施設に搬入した。

解体中の石室（北から）

発掘調査は解体作業と並行して実施し、石室の構築方法や、石材の損傷状況、壁画の保存環境に関する調査をおこなった。特に石室組立時の作業面や、床石の水平加工時に使用された水準杭の跡、石材移動用の梃子穴などを検出し、石室の構築工程復元のための貴重な資料を得ることができた。また地震による地割れが石室背面に達し、そこに植物の根が伸張するとともに、石室に侵入する虫類が生息し、石室外面にカビが密生する状況を確認した。

●キトラ古墳の調査

出土遺物の分析や発掘調査報告書の作成、編集作業をおこない、『特別史跡キトラ古墳発掘調査報告』として刊行した。本報告書は2002年度から2004年度の３ヶ年にわたる調査の正式報告であり、遺構、遺物の記載をはじめ、関連調査として金属製品やガラス玉、人骨、漆喰、石材等の分析をおこない、キトラ古墳について総合的な考察を加えたものである。また、壁画については概要をまとめるとともに、フォトマップによる画像と図像の大きさを提示した。報告書の作成を通じ、金属製品や漆膜、漆喰等の分析でさまざまな知見が得られた。漆膜の分析では、漆塗木棺は外面も赤色の可能性が高いという興味深い結論となった。また、同時に棺台があったことが想定でき、床面フォトマップの検討からは棺台の位置を推定することができた。漆喰の分析では、高松塚古墳の例と比較して鉛の含有量が極めて少ないことが判明し、鉛白の混入はしていないらしい。また、黒漆塗銀装大刀については、全体像を復原した。

●高松塚古墳シンポジウム

高松塚古墳石室の解体作業が終了したことを踏まえ、2008年１月26日に文化庁、奈良文化財研究所等の主催で一般市民を対象にしたシンポジウムが奈良県橿原市で開催された。

第一部「石室解体レポート」では、発掘調査、解体作業、カビ等の生物被害対応、修理の状況など一連の作業報告をそれぞれの担当者がおこなった。

第二部では関係者が今後の文化財保存のあり方について、パネルディスカッション形式で討議した。

４時間にもおよぶシンポジウムであったにも拘らず、会場を埋める850人の参加者は熱心に聞き入り、壁画保存事業への関心の高さをうかがわせた。

パネルディスカッション

発掘調査現地説明会・見学会

◆2007年9月1日（土）

平城第421次(東院地区中枢部)発掘調査

都城発掘調査部史料研究室　山本　崇

参加者人数：750名　調査面積：1,560㎡

◆2007年9月8日（土）

飛鳥藤原第148次（藤原宮大極殿院南門）発掘調査

都城発掘調査部考古第三研究室　高田　貫太

都城発掘調査部遺構研究室　箱崎　和久

参加者人数：1,073名　調査面積：1,560㎡

◆2007年12月15日（土）

飛鳥藤原第150次（石神遺跡第20次）発掘調査

都城発掘調査部遺構研究室　黒坂　貴裕

参加者人数：867名　調査面積：約400㎡

◆2008年1月19日（土）

平城第423次（東院地区中枢部）発掘調査

都城発掘調査部史料研究室　浅野　啓介

参加者人数：819名　調査面積：1,379㎡

◆2008年3月29日（土）

飛鳥藤原第151次（甘樫丘東麓遺跡）発掘調査

都城発掘調査部考古第一研究室　豊島　直博

参加者人数：2,100名　調査面積：950㎡

◆2008年3月30日（日）

平城第429次（東院朝堂院東方官衙地区）発掘調査

都城発掘調査部考古第三研究室　今井　晃樹

参加者人数：453名　調査面積：1,314㎡

2 研修・指導と教育

埋蔵文化財担当者研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上を図るため、地方公共団体等の埋蔵文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。今年度は、一般研修１課程、専門研修12課程の合計13課程の研修を開催した。研修総日数132日、研修生総数155名であった。

また、埋蔵文化財センター及び各研究部では、要請にしたがって地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、遺物の保存、遺跡の保存、遺跡整備等に関しての指導、助言等の協力をおこなっている。2007年度の主なものの一覧を別表に掲げた。

このほか、文化庁、各公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査、動物遺存体の同定、年輪年代測定、遺物の保存処理・分析等の受託研究もおこなった。

京都大学（大学院）との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻－文化・地域環境論講座の文化遺産学分野の客員教員として、修士課程では、文化財調査法論１と文化遺産学演習１（山中敏史・松村恵司・窪寺茂）、環境考古学論１・文化遺産学演習２（光谷拓実・肥塚隆保・松井章）、文化・地域環境基礎論（松井）を担当した。博士後期課程では、全客員教員が共生文明学特別研究や文化遺産学特別演習を担当した。

授業では、都城・寺院・官衙・集落遺跡を対象とした考古学や、建築史学、年輪年代学、保存科学、環境考古学などの講義・演習・実習などをおこない、当客員分野所属の院生（修士課程１名、博士後期課程10名）などの教育指導にあたった。

奈良女子大学（大学院）との連携教育

奈良女子大学大学院との連携教育では、大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教員として３つの科目を担当し、博士後期課程の大学院生の指導を行っている。すなわち、小林謙一（客員教授）「日本考古学の諸問題」、次山淳（客員助教授）「歴史考古学特論」、渡邉晃宏（客員教授）「歴史資料論」である。

いずれも、飛鳥地域、藤原宮・京跡、平城宮・京跡など実地の遺跡とその発掘調査、及び瓦や土器、木製品、木簡をはじめとする出土文字資料などの遺物の調査研究に密着した授業であり、大学における通常の授業では経験できない、奈文研ならではの特色ある教育を実践する場となっている。

2007年度　日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧　（委員の委嘱を受けているもの）

（青森）	三内丸山遺跡
（岩手）	志波城跡　平泉遺跡群　金ヶ崎町伝統的建造物群
（秋田）	森吉山ダム建設工事
（宮城）	多賀城跡
（福島）	根岸官衙遺跡群
（栃木）	馬屋久保遺跡　上神主・茂原官衙遺跡
（茨城）	常陸国衙跡　水戸市台渡里廃寺・大串遺跡等
（新潟）	佐渡金山遺跡
（福井）	一乗谷朝倉氏遺跡
（富山）	王塚・千坊山遺跡群　上市黒川遺跡群
（長野）	塩尻市伝統的建造物群　柳沢遺跡
（岐阜）	美濃国分尼寺跡　恵那市伝統的建造物群
（静岡）	新居関跡　興国寺城跡　長浜城跡　遠江国分寺跡
（愛知）	名古屋城跡
（三重）	上野城跡　天白遺跡　伊勢国府跡　伊勢国分寺跡　斎宮跡　亀山市伝統的建造物群
（滋賀）	安土城跡　彦根城跡　大津市伝統的建造物群　下之郷遺跡　多賀神社奥書院庭園
（京都）	恭仁宮跡　井手町内遺跡　恵解山古墳　京都府近代和風建築　高麗寺跡　大覚寺　元離宮二条城建造物　長岡宮跡
（大阪）	堺土塔　新堂廃寺等　百済寺跡　高槻市史跡高井田横穴
（兵庫）	赤穂城跡　篠山城跡　法隆寺領播磨国鵤荘史跡　新宮宮内遺跡　茶すり山古墳　姫路城跡　田淵氏庭園　池田古墳　和田岬砲台　山陽道野磨駅家跡
（奈良）	旧大乗院庭園　藤ノ木古墳　平城京左京三条二坊宮跡庭園　中宮寺跡　橿原市伝統的建造物群　大安寺旧境内　市尾墓山古墳　キトラ古墳　宇陀市松山地区伝統的建造物群
（和歌山）	高野山壇上伽藍
（鳥取）	妻木晩田遺跡　伯耆古代の丘　栃本廃寺跡　青谷上寺地遺跡
（島根）	石見銀山遺跡
（広島）	備後国府跡
（岡山）	鬼城山　西高月遺跡群　備中松山城跡　美作国分寺跡　伊部南窯跡
（山口）	周防灘干拓遺跡
（徳島）	阿波国分尼寺跡　阿波国分寺庭園
（香川）	丸亀城跡　快天山古墳　屋嶋城跡
（愛媛）	宇和島城　久米官衙遺跡群
（福岡）	大宰府史跡　下高橋官衙遺跡　鴻臚館跡　三雲遺跡
（佐賀）	名護屋城跡陣跡　天狗谷窯跡　東名遺跡群
（長崎）	原の辻遺跡　鷹島海底遺跡　旧円融寺庭園　対馬藩主宗家墓所　矢立山古墳群　金石城跡
（大分）	横尾遺跡
（宮崎）	本野原遺跡　生目古墳群

2007年度 埋蔵文化財担当者研修課程一覧

区分	課程	実施期日	定員	対象	内容	担当室	研修日数	申込者数	受講者数
一般研修	遺物観察調査課程	6月4日～6月29日	16名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、発掘調査の経験が十分でない者	各種の遺物調査に必要な基礎的知識と技術の研修	遺跡・調査技術研究室	26日	6名	6名
専門研修	文化財写真Ⅰ（基礎）課程	7月9日～7月25日	10名	地域の中核となる地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な基礎的知識と技術の研修	写真室	17日	6名	6名
	文化財写真Ⅱ（応用）課程	7月25日～8月8日	10名	〃	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な専門的知識と技術の研修	写真室	15日	6名	6名
	古代・中近世瓦調査課程	9月6日～9月13日	20名	〃	古代・中近世遺跡出土瓦の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	考古第三研究室	8日	20名	20名
	地方官衙遺跡調査課程	10月1日～10月5日	12名	〃	地方官衙遺跡の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	遺跡整備研究室	5日	14名	14名
	保存科学Ⅰ（無機質遺物）課程	10月16日～10月24日	10名	〃	遺物・遺構の保存科学的な調査法および保存修復修理に関する基礎知識と技術の習得を目指す研修	保存修復科学研究室	9日	8名	8名
	保存科学Ⅱ（有機質遺物）課程	10月24日～11月1日	10名	〃	遺物・遺構の保存科学的な調査法および保存修復修理に関する基礎知識と技術の習得を目指す研修	保存修復科学研究室	9日	8名	8名
	報告書作成課程	11月7日～11月16日	20名	〃	見やすく読みやすい報告書の作り方と、図録・学術誌編集の基礎に関する研修	企画調整室	10日	18名	18名
	遺跡地図情報課程	11月27日～11月30日	16名	〃	埋蔵文化財の調査研究へのGISの応用に関する基礎的知識の研修	文化財情報研究室	4日	15名	15名
	測量外注課程	12月10日～12月14日	10名	〃	測量外注管理に必要な基礎知識と仕様書作成の実際についての研修	遺跡・調査技術研究室	5日	14名	14名
	遺跡整備活用課程	1月15日～1月25日	12名	〃	遺跡の保存・整備に必要な専門的知識と技術の研修	遺跡整備研究室	11日	19名	14名
	竪穴建物遺構調査課程	2月4日～2月8日	12名	〃	古代を中心とした竪穴建物の調査研究に必要な専門的知識と技術の研修	企画調整部	5日	10名	10名
	地質環境調査課程	2月21日～2月28日	12名	〃	環境考古学の基幹を構成する地質環境分野の最新の研究法とその成果についての専門的知識と技術の研修	環境考古学研究室	8日	17名	16名

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「キトラ古墳壁画四神玄武」

2007年4月20日(金)～6月24日(日)

キトラ古墳壁画「玄武」特別公開　2007年5月11日(金)～27日(日)

玄武が特別公開されるのを記念して、古代における玄武の種々相を展示するよう計画した。

◆夏期企画展写真「『とき』を撮す－発掘調査と写真－」

2007年8月1日(水)～9月2日(日)

発掘調査に関連する写真資料を広くご紹介するため、このたび、飛鳥資料館では、奈良文化財研究所写真室でおこなう文化財写真業務の展覧会を企画しました。本企画展では、キトラ古墳や高松塚古墳の調査に用いた撮影機器の展示を交えつつ、当研究所が所蔵する写真資料についてご紹介した。

◆秋期特別展「奇偉荘厳　山田寺」

2007年10月19日(金)～11月25日(日)

山田寺後出土の遺物一括が2007年度に新たに重要文化財に指定された。この新指定を記念して、これまで一堂に展示されることのなかった遺物を、できる限り多く展示するように試みた。さらに展示に当たっては当館第2展示室に復元した東回廊の中に順路を設け、回廊を通りながら出土部材を見学できるように考えた。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2007」

2008年1月4日～2月3日

飛鳥において2006年度中に発掘発見された注目すべき遺物遺構について展示をおこなった。

用途別床面積(飛鳥資料館)

用途名		面積(m²)
展示部門	展示施設	976.0
	収蔵庫等	620.0
管理部門	研究室	125.0
	事務室等	619.0
共通・サービス部門・その他		2,041.3
合計		4,381.3

◆巡回展「絵で見る考古学」

2008年2月9日～3月2日

考古学イラストレーターとして著名な早川和子氏の作品展を開催した。

平城宮跡資料館の展示

通年の常設展示のほかに、以下のような特別企画展1件、速報展3件、合計4件の展示を実施した。

◆特別企画展「地下の正倉院展－平城宮木簡の世界」

2007年10月23日～12月16日

重要文化財指定をうけた平城宮跡内裏北外郭官衙出土木簡1,785点のうち、約80点を展示した。

展示は4つのテーマにわけ、2週間ごとに展示替えをおこない、展示ごとにギャラリートークを実施した。

Ⅰ　天皇の食膳　10月23日～11月4日
(ギャラリートーク　10月28日)

Ⅱ　宮廷の生活　11月6日～11月18日
(ギャラリートーク　11月11日)

Ⅲ　木簡の諸相　11月20日～12月2日
(ギャラリートーク　11月25日)

Ⅳ　宮城のまもり　12月4日～12月26日
(ギャラリートーク　12月9日)

期間限定ではあったが、木簡の実物を公開できた。木簡の面白さをアピールし、好評を博した。

なお、この展示にあわせて公開シンポジウム「木簡研究の最前線－地下の正倉院文書を読む－」(2007.11.23、平城宮跡資料館講堂)も開催された。

◆速報展「平城宮跡東方官衙の調査」 2007年6月1日～7月1日

東方官衙地区の調査成果について、写真、図面、出土遺物を展示した。

◆速報展「西大寺薬師金堂の調査」 2007年8月7日～9月4日

薬師金堂跡の調査成果を遺構の写真パネルを中心に展示した。

◆速報展「平城宮跡東院地区中枢部の調査」

2007年11月13日～12月16日

東院官衙地区の発掘成果について、遺構写真、図面、出土遺物を展示した。

解説ボランティア事業

平城宮跡を訪れる観光客に案内や解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を1999年10月から実施している。

ボランティアの募集はこれまでに4回おこなわれ、2008年4月1日現在131名（1期生46名、2期生20名、3期生37名、4期生28名）が登録されている。ボランティアに登録された者は所定の研修を受けた後、各人概ね月2～3日の活動をおこなっている。

2007年度は、1日当り7～10名が毎日（休館日をのぞく）、平城宮跡資料館、遺構展示館、東院庭園、朱雀門、第一次大極殿復原工事現場の公開施設等を拠点に、延べ7万9千有余名に解説をおこなった。

この解説ボランティア事業は、文化庁の「文化ボランティア通信」をはじめマスコミ、奈良県のＨＰ、観光情報誌等に何度も採り上げられ、熟達した高度な文化解説に来訪者からはお礼の手紙が多く寄せられている。

また、ボランティアの高い学習意欲と熱意により、「ボランティアだより」を作成している。

奈良文化財研究所は、ボランティア全員に活動着を配布するほか、ボランティアの知識向上に資するために研究所員による速報展等の説明会や学習会を開催する等、積極的な支援をおこなっている。

2007年度　平城宮跡解説ボランティア活動状況

ボランティア活動のべ人数	解説を受けた来訪者のべ人数			
	団体		個人	計
	学生	一般		
2,774	28,807	13,517	36,750	79,074

図書資料・データベースの公開

〈図書〉

図書資料室では、文化財資料のナショナルセンターとなるべく、歴史・考古学分野を中心に図書及び写真資料を収集している。本庁舎図書資料室を一般公開施設として所外の研究者および一般の方々に図書資料の閲覧・複写のサービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じての複写サービスを実施している。

また、研究所の刊行物についても、リポジトリにて画像データとしてインターネット公開をおこなっている。

〈データベース〉

本研究所では、文化財情報の電子化をおこなうとともに公開用の文化財関係データベースの作成を継続的に実施しており、そのほとんどをインターネット経由で公開している。

公開データベース一覧	2007年度アクセス件数
木簡データベース	20,427
木簡画像データベース【木簡字典】(8月以降)	6,806
全国木簡出土遺跡・報告書データベース	884
軒瓦データベース	1,079
遺跡データベース	14,932
地方官衙関係遺跡データベース	1,445
官衙関係遺跡整備データベース	549
斜面保護データベース	411
発掘庭園データベース	826
Archaeologically Excavated Japanese Gardens	604
OPAC（図書データベース）	12,837
報告書抄録データベース	3,500
薬師寺典籍文書データベース	489
大宮家文書データベース(2008年3月公開)	－
学術情報リポジトリ	(総件数未算出)

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所学報

第1冊　仏師運慶の研究（1954）
第2冊　修学院離宮の復原的研究（1954）
第3冊　文化史論叢（1955）
第4冊　奈良時代僧房の研究（1956）
第5冊　飛鳥寺発掘調査報告（1957）
第6冊　中世庭園文化史（1958）
第7冊　興福寺食堂発掘調査報告（1958）
第8冊　文化財論叢Ⅰ（1959）
第9冊　川原寺発掘調査報告（1959）
第10冊　平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告（1960）
第11冊　院の御所と御堂－院家建築の研究－（1961）
第12冊　巧匠阿弥陀仏快慶（1962）
第13冊　寝殿造系庭園の立地的考察（1962）
第14冊　唐招提寺蔵「レース」と「金亀舎利塔」に関する研究（1962）
第15冊　平城宮発掘調査報告Ⅱ 官衙地域の調査（1962）
第16冊　平城宮発掘調査報告Ⅲ 内裏地域の調査（1963）
第17冊　平城宮発掘調査報告Ⅳ 官衙地域の調査（1965）
第18冊　小堀遠州の作事（1965）
第19冊　藤原氏の氏家とその院家（1967）
第20冊　名物烈の成立（1969）
第21冊　研究論集Ⅰ（1971）
第22冊　研究論集Ⅱ（1973）
第23冊　平城宮発掘調査報告Ⅵ 平城京左京一条三坊の調査（1974）
第24冊　高山－町並調査報告－（1974）
第25冊　平城京左京三条二坊（1975）
第26冊　平城宮発掘調査報告Ⅶ 内裏北外郭の調査（1975）
第27冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ（1975）
第28冊　研究論集Ⅲ（1975）
第29冊　木曽奈良井－町並調査報告－（1975）
第30冊　五條－町並調査の記録－（1976）
第31冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ（1977）
第32冊　研究論集Ⅳ（1977）
第33冊　イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告（1977）
第34冊　平城宮発掘調査報告Ⅸ 宮城門・大垣の調査（1977）
第35冊　研究論集Ⅴ（1978）
第36冊　平城宮整備調査報告Ⅰ（1978）
第37冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ（1979）
第38冊　研究論集Ⅵ（1979）
第39冊　平城宮発掘調査報告Ⅹ 古墳時代Ⅰ（1980）
第40冊　平城宮発掘調査報告ⅩⅠ 第一次大極殿地域の調査（1981）
第41冊　研究論集Ⅶ（1984）
第42冊　平城宮発掘調査報告ⅩⅡ 馬寮地域の調査（1984）
第43冊　日本における近世民家（農家）の系統的発展（1984）
第44冊　平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告（1985）
第45冊　薬師寺発掘調査報告（1986）
第46冊　平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書（1988）
第47冊　研究論集Ⅷ（1988）
第48冊　年輪に歴史を読む －日本における古年輪学の成立－（1990）
第49冊　研究論集Ⅸ（1990）
第50冊　平城宮跡発掘調査報告書ⅩⅢ 内裏の調査Ⅱ（1990）
第51冊　平城宮跡発掘調査報告書ⅩⅣ 平城宮第二次大極殿院の調査（1992）
第52冊　西隆寺発掘調査報告書（1992）
第53冊　平城宮朱雀門の復原的研究（1993）
第54冊　平城京左京二条二坊・三条二坊－長屋王邸・藤原麻呂邸－発掘調査報告（1994）
第55冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ －飛鳥水落遺跡の調査－（1994）
第56冊　平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告（1997）
第57冊　日本の信仰遺跡（1998）
第58冊　研究論集Ⅹ（1999）

第59冊　中世瓦の研究（1999）
第60冊　研究論集ＸＩ（1999）
第61冊　研究論集ＸⅡ（2000）
第62冊　史跡頭塔発掘調査報告（2000）
第63冊　山田寺発掘調査報告（2001）
第64冊　研究論集ＸⅢ（2001）
第65冊　文化財論叢Ⅲ　奈良文化財研究所
　　創立五十周年記念論文集（2002）
第66冊　研究論集ＸⅣ（2002）
第67冊　平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
　　旧石器時代編［法華寺南遺跡］（2002）
第68冊　吉備池廃寺発掘調査報告
　　百済大寺跡の調査（2002）
第69冊　平城宮発掘調査報告ＸＶ
　　東院庭園地区の調査（2002）
第70冊　平城宮発掘調査報告ＸⅥ
　　兵部省地区の調査（2004）
第71冊　飛鳥池遺跡発掘調査報告（2004）
第72冊　奈良山発掘調査報告Ⅰ
　　石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査（2004）
第73冊　タニ窯跡Ａ６号窯跡発掘調査報告書（2004）
第74冊　古代庭園研究Ⅰ（2005）
第75冊　中国古代の銅剣（2006）
第76冊　法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告（2006）
第77冊　日韓文化財論集Ⅰ（2007）

奈良文化財研究所史料

第１冊　南無阿弥陀仏作善集（複製）（1954）
第２冊　西大寺叡尊伝記集成（1955）
第３冊　仁和寺史料　寺誌編１（1963）
第４冊　俊乗坊重源史料集成（1964）
第５冊　平城宮木簡１　図版
　　（平城宮発掘調査報告Ⅴ）（1966）
　　別冊　平城宮木簡１　解説
　　（平城宮発掘調査報告Ⅴ）（1969）
第６冊　仁和寺史料　寺誌編２（1967）
第７冊　唐招提寺史料Ⅰ（1970）
第８冊　平城宮木簡２　図版
　　（平城宮発掘調査報告Ⅷ）（1974）
　　別冊　平城宮木簡２　解説
　　（平城宮発掘調査報告Ⅷ）（1975）
第９冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅰ（1974）
第10冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ（1975）
第11冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ（1976）
第12冊　藤原宮木簡１　図版・解説（1977）
第13冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ（1977）
第14冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ（1978）
第15冊　東大寺文書目録第１巻（1978）
第16冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ（1979）
第17冊　平城宮木簡３　図版・解説（1979）
第18冊　藤原宮木簡２　図版・解説（1979）
第19冊　東大寺文書目録第２巻（1979）
第20冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅶ（1980）
第21冊　東大寺文書目録第３巻（1980）
第22冊　七大寺巡礼私記（1981）
第23冊　東大寺文書目録第４巻（1981）
第24冊　東大寺文書目録第５巻（1982）
第25冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅰ（1982）
第26冊　東大寺文書目録第６巻（1983）
第27冊　木器集成図録－近畿古代編－（1984）
第28冊　平城宮木簡４　図版・解説（1985）
第29冊　興福寺典籍文書目録第１巻（1985）
第30冊　山内清男考古資料Ⅰ（1988）
第31冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅱ（1988）
第32冊　山内清男考古資料２（1989）
第33冊　山内清男考古資料３（1991）
第34冊　山内清男考古資料４（1991）
第35冊　山内清男考古資料５（1991）
第36冊　木器集成図録－近畿原始編－（1992）
第37冊　梵鐘実測図集成（上）（1992）
第38冊　梵鐘実測図集成（下）（1993）
第39冊　山内清男考古資料６（1993）
第40冊　山田寺出土建築部材集成（1994）
第41冊　平城京木簡１（1994）
第42冊　平城宮木簡５（1995）
第43冊　山内清男考古資料７（1995）
第44冊　興福寺典籍文書目録第２巻（1995）
第45冊　北浦定政関係資料（1996）
第46冊　山内清男考古資料８（1996）
第47冊　北魏洛陽永寧寺（1997）
第48冊　発掘庭園資料（1997）
第49冊　山内清男考古資料９（1997）

第50冊　山内清男考古資料10（1998）
第51冊　山内清男考古資料11（1999）
第52冊　地域文化財の保存修復　考え方と方法（1999）
第53冊　平城京木簡２　長屋王家木簡２（2000）
第54冊　山内清男考古資料12（2000）
第55冊　法隆寺古絵図集（2001）
第56冊　法隆寺考古資料（2001）
第57冊　日中古代都城図録（2002）
第58冊　山内清男考古資料13（2002）
第59冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅲ（2002）
第60冊　平城京条坊総合地図（2002）
第61冊　鞏義黄冶唐三彩（2002）
第62冊　北浦定政関係資料　松の落ち葉（2002）
第63冊　平城宮木簡６（2003）
第64冊　平城京出土古代官銭集成Ⅰ（2003）
第65冊　北浦定政関係資料　松の落ち葉二（2003）
第66冊　山内清男考古資料14（2003）
第67冊　興福寺典籍文書目録第３巻（2003）
第68冊　古代東アジアの金属製容器Ⅰ中国編（2003）
第69冊　平城京漆紙文書（一）（2004）
第70冊　山内清男考古資料15（2004）
第71冊　古代東アジアの金属製容器Ⅱ
　　朝鮮・日本編（2004）
第72冊　畿内産土師器集成西日本編（2004）
第73冊　黄冶唐三彩窯の考古新発見（2005）
第74冊　山内清男考古資料16（2005）
第75冊　平城京木簡３　二条大路木簡１（2005）
第76冊　評制下荷札木簡集成（2005）
第77冊　平城京出土陶硯集成Ⅰ（2005）
第78冊　黒草紙・新黒双紙（2006）
第79冊　飛鳥藤原京木簡一　－飛鳥池・山田寺木簡－
　　（図版編）（2006）
第79冊　飛鳥藤原京木簡一　－飛鳥池・山田寺木簡－
　　（解説編）（2006）
第80冊　平城京出土陶硯集成Ⅱ（2006）

奈良文化財研究所基準資料

第１冊　瓦編１　解説（1973）
第２冊　瓦編２　解説（1974）
第３冊　瓦編３　解説（1975）
第４冊　瓦編４　解説（1976）
第５冊　瓦編５　解説（1976）
第６冊　瓦編６　解説（1978）
第７冊　瓦編７　解説（1979）
第８冊　瓦編８　解説（1980）
第９冊　瓦編９　解説（1983）

飛鳥資料館図録

第１冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏（1976）
第２冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏　銘文篇（1976）
第３冊　日本古代の墓誌（1977）
第４冊　日本古代の墓誌　銘文篇（1978）
第５冊　古代の誕生仏（1978）
第６冊　飛鳥時代の古墳
　　－高松塚とその周辺－（1979）
第７冊　日本古代の鴟尾（1980）
第８冊　山田寺展（1981）
第９冊　高松塚拾年（1982）
第10冊　渡来人の寺－桧隈寺と坂田寺－（1983）
第11冊　飛鳥の水時計（1983）
第12冊　小建築の世界－埴輪から瓦塔まで－（1983）
第13冊　藤原－半世紀にわたる調査と研究－（1984）
第14冊　日本と韓国の塑像（1985）
第15冊　飛鳥寺（1985）
第16冊　飛鳥の石造物（1986）
第17冊　萬葉乃衣食住（1987）
第18冊　壬申の乱（1987）
第19冊　古墳を科学する（1988）
第20冊　聖徳太子の世界（1988）
第21冊　仏舎利埋納（1989）
第22冊　法隆寺金堂壁画飛天（1989）
第23冊　日本書紀を掘る（1990）
第24冊　飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察（1991）
第25冊　飛鳥の源流（1991）
第26冊　飛鳥の工房（1992）
第27冊　古代の形（1994）
第28冊　蘇我三代（1995）
第29冊　斉明紀（1996）
第30冊　遺跡を測る（1997）
第31冊　それからの飛鳥（1998）
第32冊　UTAMAKURA（1998）
第33冊　幻のおおでら－百済大寺（1998）

第34冊　鏡を作る　海獣葡萄境を中心として（1999）
第35冊　あすかの石造物（1999）
第36冊　飛鳥池遺跡（2000）
第37冊　遺跡を探る（2001）
第38冊　'あすか－以前'（2002）
第39冊　Ａ０の記憶（2002）
第40冊　古年輪（2003）
第41冊　飛鳥の湯屋（2003）
第42冊　古代の梵鐘（2004）
第43冊　飛鳥の奥津城
　　－キトラ・カラト・マルコ・高松塚（2004）
第44冊　東アジアの古代苑池（2005）
第45冊　キトラ古墳と発掘された壁画たち（2005）
第46冊　キトラ古墳壁画四神玄武（2007）
第47冊　奇偉荘厳　山田寺（2007）

飛鳥資料館カタログ

第１冊　仏教伝来飛鳥への道（1975）
第２冊　飛鳥の寺院遺跡１－最近の出土品（1975）
第３冊　飛鳥の仏像（1978）
第４冊　桜井の仏像（1979）
第５冊　高取の仏像（1980）
第６冊　橿原の仏像（1981）
第７冊　飛鳥の王陵（1982）
第８冊　大官大寺－飛鳥最大の寺－（1985）
第９冊　高松塚の新研究（1992）
第10冊　飛鳥の一と－最近の調査から－（1994）
第11冊　山田寺（1997）
第12冊　山田寺東回廊再現（1997）
第13冊　飛鳥のイメージ（2001）
第14冊　古墳を飾る（2005）
第15冊　うずもれた古文書（2005）
第16冊　飛鳥の金工－海獣葡萄鏡の諸相－（2006）
第17冊　飛鳥の考古学2006（2006）
第18冊　「とき」を撮す－発掘調査と写真－（2007）
第19冊　飛鳥の考古学2007（2007）

その他の刊行物（2007年度）

奈良文化財研究所紀要2007
奈文研ニュースNo.25
奈文研ニュースNo.26
奈文研ニュースNo.27
奈文研ニュースNo.28
埋蔵文化財ニュース130
埋蔵文化財ニュース131
埋蔵文化財ニュース132
埋蔵文化財ニュース133
平安時代庭園に関する研究１
古代豪族居宅の構造と機能
遺跡の教育面に関する活用－平成18年度遺跡整備・活用研究集会（第１回）報告書－
高知県中芸地区森林鉄道遺産調査報告書
遺跡整備調査報告－管理運営体制および整備活用手法に関する類例調査－
重要文化財建造物現状変更説明1968～1970（本文編）
重要文化財建造物現状変更説明1968～1970（図版編）
重要文化財建造物現状変更説明1965～1967（本文編）
重要文化財建造物現状変更説明1965～1967（図版編）
飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報21
平城宮発掘調査出土木簡概報38
地下の正倉院展－平城宮木簡の世界－
日本各地・各時代の焼失竪穴建物跡

人事異動（2007.4.1～2008.3.31）

●2007年4月1日付け

副所長　巽　淳一郎
　兼・都城発掘調査部長
管理部長　西村　博美
管理部文化財情報課課長補佐　永井あつ子
管理部管理課会計係長　浅井　久敬
管理部管理課庶務係　延原　由紀
都城発掘調査部副部長　山崎　信二
文化遺産部景観研究室長　内田　和伸
都城発掘調査部考古第三研究室長　深澤　芳樹
都城発掘調査部上席研究員　玉田　芳英
文化遺産部主任研究員　平澤　毅
企画調整部展示企画室　西田　紀子
　兼・飛鳥資料館学芸室
都城発掘調査部考古第二研究室　丹羽　崇史
文化庁文化財部記念物課　中島　義晴
文化庁文化財部参事官付　清永　洋平
文化庁文化財部伝統文化課アイヌ文化振興専門官　鈴木　修二
大阪大学レーザーエネルギー学研究センター庶務係長　小野栄津夫
京都大学財務部財務戦略・分析課専門員　永田　裕美
京都大学医学部附属病院経営管理課専門職員　及川　厚
本部事務局総務企画課人事担当　高田　幸恵

●2007年6月1日付け

都城発掘調査部考古第一研究室　城倉　正祥
都城発掘調査部遺構研究室　番　光
文化遺産部特別研究員　惠谷　浩子
都城発掘調査部特別研究員　青木　敬

●2007年9月9日付け

文化庁文化財部記念物課専門官　佐藤　敏明

●2007年9月10日付け

管理部業務課長　東　博信

●2007年9月30日付け

大阪大学国際部国際連携課国際連携係長　浅井　久敬

●2007年10月1日付け

管理部管理課会計係長　江川　正
管理部管理課用度係長　柳生　弘和

●2007年11月1日付け

都城発掘調査部特別研究員　古藤　真平

●2008年1月16日付け

都城発掘調査部特別研究員　加藤　雅士

●2008年3月31日付け

定年退職　巽　淳一郎
定年退職　岡村　道雄
定年退職　高瀬　要一
定年退職　安田龍太郎
定年退職　光谷　拓実
辞職　岡田　祐一

予算等

予算（予定額）

単位：千円

	2007年度	2008年度（予定額）
文部科学省からの運営費交付金（人件費を除く）	1,007,566	971,548
施設整備費	26,250	0
自己収入（入場料等）	29,042	29,332
計	1,062,858	1,000,880

土地と建物

単位：m²

	土地	建物（建面積／延面積）	建築年
本館地区	8,860.13	2,754.25/6,754.86	1964年他
平城宮跡資料館地区	※	10,630.53/16,149.67	1970年他
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	20,515.03	6016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥資料館地区	17,092.93	2657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費補助金（2008年5月14日現在）

単位：千円

研究種目	2007年度		（参考）2008年度	
	件数	金額	件数	金額
特別研究促進費	2	7,000	0	—
基盤研究（S）	1	21,060	1	37,310
基盤研究（A）	4	46,410	4	38,480
基盤研究（B）	7	31,200	6	22,880
基盤研究（C）	6	7,180	8	10,630
若手研究（B）	12	9,580	16	20,436
若手研究（スタートアップ）	3	3,110	1	819
特別研究員奨励費	1	1,100	1	1,100
研究公開促進費（学術図書）	1	4,100	0	—

受託調査研究

単位：千円

区分	2006年度		2007年度	
	件数	金額	件数	金額
研究	17	62,174	17	71,973
発掘	5	52,368	10	27,460
計	22	114,542	26	99,433

職員一覧（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）

- 奈良文化財研究所長 田辺征夫
  - 副所長 山崎信二
  - 管理部長 西村博美
    - 管理課長 仁木俊二
      - 課長補佐 廣中保彦 / 清水　尚
        - 庶務係長 (兼)廣中保彦
          - 係員 井手真二
        - 会計係長 江川　正
        - 用度係長 柳生弘和
          - 係員 大村尚江
        - 専門職員 松本正典
        - 専門職員 (兼)飯田信男
      - 事務補佐員 大西和子／岩永恵子／新宮恵子／松森左千子
      - 事務補佐員 井野由宜子／上村敬子／永井和代／山口由佳
      - 事務補佐員 港　悦子／幸田恵里子／竹田恵美
    - 業務課長 東　博信
      - 課長補佐 今西康益
        - 研修・事業係長 石田義則
          - 係員 三本松俊徳
        - 施設係長 志野愛由美
        - 専門職員 飯田信男
    - 文化財情報課長 平石憲良
      - 課長補佐 永井あつ子
        - 普及・資料係長 桑原隆佳
        - 図書・情報係長 太田　仁
        - 専門職員 車井俊也
      - 事務補佐員 岡本倫子／内海真理
      - 事務補佐員 伊藤久美／上野文絵
  - 企画調整部長 小林謙一
    - 企画調整室長 小池伸彦
    - 文化財情報研究室長 森本　晋
    - 国際遺跡研究室長 井上和人 (兼)森本　晋／窪寺　茂
      - 石村　智
      - 特別研究員 脇谷草一郎
    - 展示企画室長 杉山　洋
      - 西田紀子
    - 写真室長 (兼)小林謙一
      - 専門職員 [藤]井上直夫
      - 専門職員 牛嶋　茂
        - 主任 中村一郎
      - 技能補佐員 [藤]岡田　愛
      - 技能補佐員 鎌倉　綾
    - 上席研究員 千田剛道
    - 主任研究員 加藤真二
  - 文化遺産部長 山中敏史
    - 歴史研究室長 吉川　聡
    - 建造物研究室長 窪寺　茂
    - 景観研究室長 内田和伸
    - 遺跡整備研究室長 平澤　毅
      - 粟野　隆
      - 特別研究員 惠谷浩子
    - 主任研究員 清水重敦
  - 都城発掘調査部長 松村恵司
    - 考古第一研究室長 [平]難波洋三
      - [平]和田一之輔／城倉正祥／国武貞克
      - [藤]豊島直博／廣瀬　覚／青木　敬
      - 特別研究員 [藤]木村理恵
    - 考古第二研究室長 [平]西口壽生
      - [平]神野　恵／森川　実
      - [藤]小田裕樹／丹羽崇史
      - 任期付研究員 [平]加藤雅士
      - 特別研究員 [藤]関広尚世／若杉智宏
    - 考古第三研究室長 [平]深澤芳樹
      - [平]今井晃樹／林　正憲
      - [藤]中川あや／高田貫太
      - 特別研究員 [藤]石田由紀子
    - 史料研究室長 [平]渡邉晃宏
      - [平]馬場　基／浅野啓介
      - 特別研究員 [平]古藤真平
    - 遺構研究室長 [平]島田敏男
      - [平]大林　潤／高橋知奈津
      - [藤]黒坂貴裕／番　光
    - ※[平]は平城地区、[藤]は飛鳥・藤原地区を示す
    - 上席研究員 [藤]玉田芳英
    - 主任研究員 [平]山本　崇　[藤]次山　淳／箱崎和久／市　大樹／降幡順子
    - 専門職員 (兼)[藤]松本正典
      - 事務補佐員 [藤]吉岡佐和子
      - 技能補佐員 [藤]木寅貢志／山田昇司
  - 埋蔵文化財センター長 肥塚隆保
    - 保存修復科学研究室長 高妻洋成
      - (兼)降幡順子
    - 環境考古学研究室長 松井　章
      - 山崎　健
    - 年代学研究室長 (兼)肥塚隆保
    - 遺跡・調査技術研究室長 小澤　毅
    - 主任研究員 金田明大／大河内隆之
  - 飛鳥資料館長 (兼)田辺征夫
    - 学芸室長 (兼)杉山　洋
      - (兼)西田紀子
    - 主任研究員 (兼)加藤真二
    - 専門職員 (兼)車井俊也
      - 事務補佐員 大谷照子／米川まち子／辻本あらた

2008.4.1 現在